二松学舎大学大学院文学研究科・大阪大学大学院基礎工学研究科
株式会社 国際電気通信基礎技術研究所（ATR）

「漱石アンドロイド」プロジェクト
2023年度 共同研究報告書

二松學舍大學 NISHOGAKUSHA UNIVERSITY
大阪大学 OSAKA UNIVERSITY
ATR Advanced Telecommunications Research Institute International

Contents　目　次

04 「漱石アンドロイド」運用経緯と研究の動向（2023年度）
学校法人二松学舎　常任理事　西畑 一哉

08 三次元と二次元、現実と虚構とのあわい――2023年度研究活動の概要
二松学舎大学大学院文学研究科　教授　山口 直孝

10 ロボット学者はなぜ小説を書くのか？
漱石アンドロイドと人間学としてのロボット研究
大阪大学大学院基礎工学研究科　教授
ATR石黒浩特別研究所　客員所長　石黒 浩

12 ロボティクスと構成論と小説
立命館大学情報理工学部　教授　谷口 忠大

14 アンドロイドと人間――関係性の問題をめぐって
二松学舎大学大学院文学研究科　教授　増田 裕美子

18 漱石、プラグマティズム、信頼できない語り手
大阪成蹊大学　講師　加藤 隆文

22 アンドロイドはいかに語られてきたか――文学と科学の輪舞
二松学舎大学大学院文学研究科　研究助手　伊豆原 潤星

26 ただ会場にいるだけの勇気
漫画批評家　夏目 房之介

27 漱石アンドロイドのありふれた物語
二松学舎大学文学部　准教授　谷島 貫太

30 学生による新たな試み――漱石アンドロイドサークルの活動報告
二松学舎大学大学院文学研究科　助手　松本 創太
二松学舎大学大学院文学研究科　助手　小林 もも花

32 YouTube「漱石アンドロイドチャンネル」の運用研究
二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科　学生　東井 夕紀菜

「漱石アンドロイド」運用経緯と研究の動向（2023 年度）

学校法人二松学舎
常任理事　西畑 一哉

1. 漱石アンドロイドの製作時の記憶

二松学舎では、創立140周年記念事業として、二松学舎の卒業生である夏目漱石をアンドロイドとして甦らせる「漱石アンドロイドプロジェクト」を立ち上げた。2016年12月8日、夏目漱石の没後100年の命日の前日に、漱石アンドロイドが完成し、完成披露記者会見が行われた。記者会見では、漱石アンドロイドのデモンストレーションに始まり、監修者の石黒浩大阪大学大学院教授や漱石アンドロイドの音素登録を担当していただいた夏目房之介学習院大学大学院教授（当時）に様々な質問が飛び、賑やかな完成披露記者会見になった。

記者会見も一旦終了したタイミングで、筆者はある記者から次のような質問を受けた。「明日から漱石アンドロイドの本格運用が始まる訳だがそれとは別に、将来の究極的な夢として、漱石アンドロイドにどのようなことをさせてみたいと考えているか」。少し考えた結果、「夏目漱石の最後の作品は『明暗』だが、漱石が亡くなったことにより未完のままとなっている。将来的にAI技術が飛躍的に発展し、漱石の疑似人格的なものが搭載できるようになれば、漱石の疑似人格的AIに『明暗』の続編を書いてもらい、それを漱石アンドロイドに朗読してもらうのが夢だ」と答えた記憶がある。

この半ば夢のような話が、思ったよりも早く実現する世界が近づいているのかもしれない。

漱石アンドロイド完成披露記者会見の写真（2016年12月8日）

2．生成AIと大規模言語モデルの登場

（1）2024年シンポジウム「ロボット学者はなぜ小説を書くのか？――漱石アンドロイドと人間学としてのロボット研究」

2024年3月2日に、二松学舎大学で「ロボット学者はなぜ小説を書くのか？――漱石アンドロイドと人間学としてのロボット研究」とのテーマでシンポジウムが開催された。石黒浩大阪大学大学院教授、谷口忠大立命館大学教授による講演後、谷島貫太二松学舎大学准教授を交えたディスカッションで構成された第1部では、石黒浩、谷口忠大というロボット・アンドロイド研究の第一人者である両教授から、自身が小説を書くに至った経緯やその背景などについて、詳しく説明をしていただいた（また、石黒教授からは来年開催予定の大阪万国博覧会において、アンドロイド館が重要なテーマ館となることも説明があった）。石黒教授も谷口教授もロボット・アンドロイド研究をスタートさせたのは、結局のところ「人間とは何か」という究極の問いに答えるため、という言葉が印象的であった。

また、昨年来AI研究に衝撃を与えたChatGPTに代表される生成AIの急速な進展が影の通奏低音のようにシンポジウム全体を覆っていた。谷口教授などは、「生成AI特にChatGPTに代表される大規模言語モデルの登場は、グーテンベルグの活版印刷の発明に近いインパクトを与えるだろう」との評価であった。

（2）ChatGPT・大規模言語モデル

ここではChatGPTの構造や考え方には立ち入らないが、ChatGPT・大規模言語モデルでは、語順と次に来る語彙の推定により文章を組み立てている。ChatGPT・大規模言語モデルの登場は、「人間の知性とは何か」という究極の問いと直結している。人間が複雑な言語を操り、人間の進化の過程で言語による思考の深化が始まった時期は明確ではないが、現在に至るまで「言葉」は単なる伝達手段ではなく、人間の実存の根底をなすものとして、神話、詩、物語、小説として読まれ、書かれてきた。それが、人間が独占するものではなくなりつつあるという実感は大きなインパクトを与えると言えよう。

シンポジウム「ロボット学者はなぜ小説を書くのか？
――漱石アンドロイドと人間学としてのロボット研究」写真

（3）ChatGPTは「チューリング・テスト」に合格するのか

AIがどこまで人間に近づいているか、AIはどの時点で人間と同様な知性をもっていると判定できるのか。こうした問いに対して、チューリング・テストというものがある。

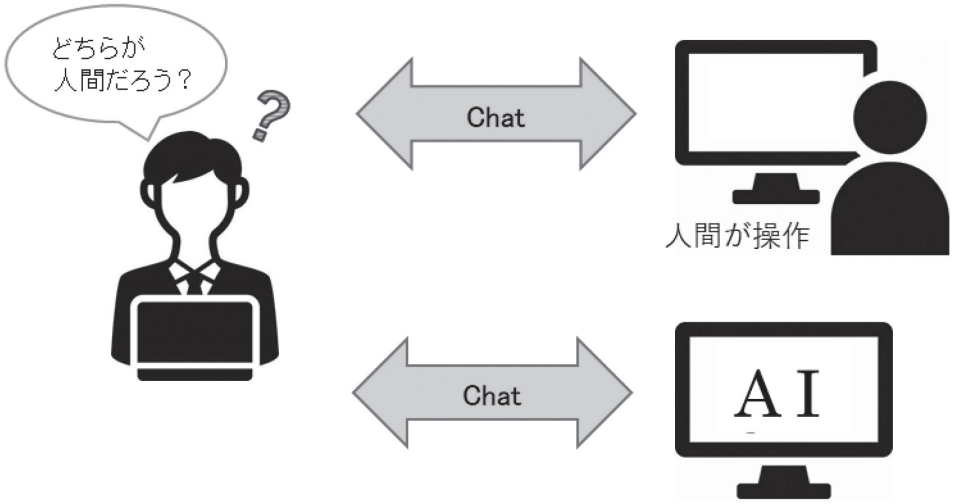
このテストを考えたアラン・チューリングは、コンピュータ黎明期の大数学者で、第2次世界大戦中ドイツ軍のエニグマ暗号を用いた暗号文の解読に成功し、第2次世界大戦の連合軍の勝利に大きく貢献した人物である。

チューリングが主張したチューリング・テストとは、AIが人間を模倣し、それに対して人間が気づけるかどうかをテストすることである。

具体的には、2台のディスプレイの前にテストする側の人間がいるとする。1台のディスプレイには別の人間が隠れていてchat等で応対する。もう1台には人間をまねるようにAIが振る舞い対応する。例えば、計算に時間をかけたりすることもある。このようにして、2台のディスプレイを見ながらテストしている人間が、どちらがAIでどちらが人間であるかを判断する。どちらが人間であるかが判断できなければ、このAIには「知性」があると判断するのがチューリング・テストである。

この場合、AI自身が知性の自覚をもっているかどうかは問題ではない。知性をもっているように見えることが問題の核心だというのが、アラン・チューリングの考え方であった。2024年「ロボット学者はなぜ小説を書くのか？――漱石アンドロイドと人間学としてのロボット研究」のシンポジウムの後半でも、「AIが知性を持っているという自覚があるかは問題ではない」むしろ「AIのふるまいが知性を持っているかのように見えること」が重要だという認識もありうるとの考えが示された。

ChatGPTの最新バージョンは既にチューリング・テストに合格しているのではないか。個人で有料版を利用している人ならば納得してもらえると思うが、昨年初の利用が始まった当初からすると、「知性」は高度化しており、反応面でも、一瞬回答に躊躇するような行動も見受けられるように、「人間らしい振る舞い」が出てきたというように感じる。



チューリング・テストのイメージ

3．生成AIの可能性

最近のニュースで聞いた話だが、手塚治虫の『ブラック・ジャック』の最新話をAIを用いて作成するというプロジェクトが立ち上がっているそうである。勿論、手塚治虫は40年以上前に逝去しているから、このプロジェクトでは、手塚治虫の各種著作や漫画のストーリーをベースにして、ブラックジャックの過去の物語をAIに読み込ませ、一定の前提を置いたうえで新しいブラックジャックの物語を作成させるということである。

また、今回の「ロボット学者はなぜ小説を書くのか?―漱石アンドロイドと人間学としてのロボット研究」のシンポジウムにおいて、石黒浩教授が紹介したビデオが興味深かった。石黒浩教授に似せたアンドロイド（ジェミノイド）が学生と対話する。石黒浩教授に似せたアンドロイド（ジェミノイド）には、AIが搭載されており、そのAIには石黒教授の過去の著作を読み込ませておくと、まるで石黒教授のように振る舞い、学生との対話が十分成り立つということだった。

漱石全集を持ち出すこともないが、漱石の著作はかなり多い。とはいえAIの記憶容量からすれば、許容範囲だろう。

その意味で、冒頭に記した、「漱石の疑似人格的なものがAIに搭載できるようになれば、漱石の疑似人格的AIに『明暗』の続編を書いてもらい、それを漱石アンドロイドに朗読してもらう」という夢が現実味を帯びてきているといえよう。

4．デルフィのアポロン神殿の格言

ギリシャのデルフィにあるアポロン神殿は古代ギリシャの最高の神託が下る神殿として有名だった。プラトンによればそのアポロン神殿の入口に「汝自身を知れ」という格言が紀元前5世紀に刻まれたとのことである。

この神託の言葉の一解釈として、人間は人間自身とはなにかという問いを追い続けるものだ、という考えがある。

2024年3月のシンポジウム「ロボット学者はなぜ小説を書くのか?―漱石アンドロイドと人間学としてのロボット研究」においても、石黒浩、谷口忠大の著名なロボット学者は「結局人間とは何かという問いのためにロボット・アンドロイドを研究している」とのことだった。加えて、生成AI・大規模言語モデルの登場により、人間とAIの境界線をさらに曖昧なものとしようとしている。真の意味で、人間とは何かが問われる時代が来ている。

デルフィのアポロン神殿の遺跡写真

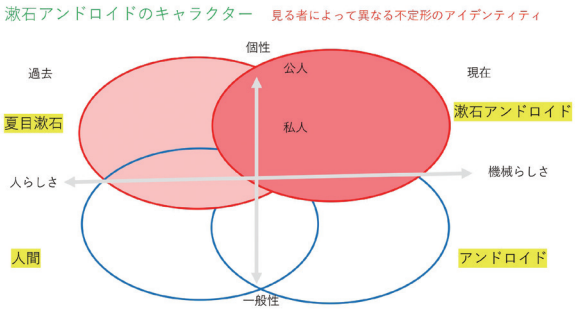
三次元と二次元、現実と虚構とのあわい ——2023 年度研究活動の概要

二松学舎大学大学院文学研究科
教授　山口 直孝

漱石アンドロイドプロジェクトが始動してから、7年目を迎える。そのうち、2020年度、2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、停滞を余儀なくされた。漱石アンドロイド自体は感染症と無縁であるが、操演に人手を要するのが枷となった。今からふり返れば動画配信などに活路を求めることもできたように思うが、当時は発想がそこまで及ばなかった。物としての存在感に魅力があるという先入観に縛られていたと言えよう。

本格的な活動再開は、2022年度になってからである。二松学舎大学特別教授夏目漱石（漱石アンドロイド）研究室を新たに確保することができた。研究拠点ができたことで、AR分科会や漱石アンドロイドサークルの取り組みの幅が拡がった。催しの準備を行うだけでなく、アンドロイドと向き合いながら議論し、事業を考える営みが定着したことは大きい。2023年度は、漱石アンドロイドの日常化とでも呼ぶべき状況が生まれ、その中で多面的な活動を展開することができた。

操演に携わる人間とアンドロイドとの間に多面的な関係が形成されたことも、収穫として見逃せない。夏目漱石、ロボット、二松学舎のマスコットなど、漱石アンドロイドに与えられる属性は一つではない。動かす側も、時に機械として、また時に親しい人として漱石アンドロイドに接している。複数のイメージを帯びた漱石アンドロイドは、場面によって引き受ける役割を変えつつ、他に似たもののない単独者としての存在感を、いよいよ際立たせていく。画像①は、キャラクターの拡がりを図式化したものである。複数の顔を持つ個性的なキャラクターとして、漱石アンドロイドは、三次元だけではなく、二次元の世界でも、また、現実だけではなく、虚構の空間でも活躍できる潜在能力を持つ。境界線を自在に越えていく特性をいよいよ自覚し、新しい発信の形を探ったところに活動の核心が認められるように思われる。以下、本年度の成果を略述する。



①漱石アンドロイドのキャラクター

①　シンポジウム「ロボット学者はなぜ小説を書くのか？——漱石アンドロイドと人間学としてのロボット研究」の開催

「誰が漱石を甦らせる権利をもつのか？——偉人アンドロイド基本原則を考える」（2018年8月26日）、「アンドロイドに魂は宿るか？——漱石アンドロイドをめぐる3つの視点」（2019年11月9日）に続く、三回目のシンポジウムが2024年3月2日に行われた。谷島貫太准教授が企画立案し、統括した催しであり、パネリストは、石黒浩氏（大阪大学）、谷口忠大氏（立命館大学）、夏目房之介氏（マンガ批評家）、加藤隆文氏（大阪成蹊大学）らが務め、二松学舎からは谷島准教授のほか、増田裕美子教授、伊豆原潤星非常勤講師が登壇した。

オープニングパフォーマンス「ポーの奇妙な物語——開会の辞に代えて」では、「夏目漱石」の役割を引き受けさせられたロボットとしての心情を漱石アンドロイドが語った。自己言及的なモノローグは、アンドロイドと人間との関係をより相互干渉的であり、可変的なものとしてとらえるシンポジウムの志向を端的に示したものであり、これまでのアンドロイド観を一歩進めるものと言える。人工知能によってアンドロイドが意識を獲得する事態が絵空事ではなくなった現在において、漱石アンドロイドを手がかりとして、ロボット、人間それぞれの単独性を問うことは時宜を得ており、文芸的な想像力が原理的な思考に欠かせない事情が明らかにされたことにおいても意義があった。（本報告書10〜29ページ参照）

②　シンポジウム「ニューノーマル時代における日本語教育と日本研究の未来」における報告

2023年4月29日、台湾高雄の文藻外語大学で開かれた応用日本語国際シンポジウム「ニューノーマル時代における日本語教育と日本研究の未来」に山口が招待され、講演「「夏目漱石」が朗読する『夢十夜』——アンドロイドによる文学

教育の試み」を行った。本シンポジウムは、台湾応用日語学会と日本比較文化学会との共催によるものであり、漱石アンドロイドプロジェクトとして、海外における最初の成果発表となる。

講演では、漱石アンドロイドの紹介を行い、プロジェクトの概要を説明した後、『夢十夜』「第三夜」の朗読を披露した。理想は漱石アンドロイドの実演であるが、条件が整わなかったため、伊豆原非常勤講師が作成した動画を紹介することに代えた。会場に三面の巨大スクリーンが備わっていたこともあり、蠟燭灯を小道具に用い、声を抑え気味にした朗読は、参加者に強い印象を与えたように感じられた（画像②参照）。

②ニューノーマル時代における日本語教育と日本研究の未来（2023年4月29日）

講演では漱石アンドロイドの複合的なキャラクターを今後さまざまにふくらませ、活用していく予定であることを述べた。台湾では、夏目漱石の名がある程度知られている。日本語教育の教材として活用することも、可能であろう。AIによる言語学習とは対極的な、会話生成型でないロボットによる異言語の学習も、一つの選択肢になりうる感触が得られたことでも貴重な機会となった。

③　特別授業の実施

漱石アンドロイドを用いた特別授業を、日本文学概論A（担当：山口直孝、水曜日1限および担当：妹尾好信、水曜日2限、いずれも2023年4月19日）において実施した。本科目は、文学部国文学科1年生の必修授業であり、受講者は、2クラスで300人を超える。2023年度は、動画「Movin' SOSEKI――漱石アンドロイドproject」を用いた紹介の後、サークルメンバーの東井夕紀菜の司会進行の下、漱石アンドロイドが受講生に挨拶し、『夢十夜』「第三夜」の朗読を行った。サークル活動の説明の後、アンケートに協力を求め、最後に撮影時間を設けた。受講生の反応はよく、二松学舎でしか体験できない授業として、特別授業は春の行事として定着した観がある。

④　オープンキャンパス、創縁祭におけるパフォーマンス

オープンキャンパス（2023年8月20日）、創縁祭（11月3日）に「漱石アンドロイドクイズ大会＆朗読」を開催した。クイズは、新たな試みであり、漱石にちなんだ問題を出し、正解の後に簡単な解説を行う流れとなっている。参加者には解答用紙記入の形で参加してもらい、全問正解者にはグッズを進呈した。朗読の場合よりも能動的な関わりを参加者に求めるところにクイズの特色があり、教養を問う趣向が漱石アンドロイドによく適合していたように感じられた。

朗読は、『吾輩は猫である』の冒頭を取り上げた。誰もが知る一節であるだけに、短い時間であったが、鮮やかな印象を与えたようである。

なお会場は、中洲記念講堂がふさがっていたため、初めて階段教室を用いた。複数の電源系統を確保できるか、不安な要素があったが、問題なく催しを進めることができた。学内でイベントを開催する際、会場の選択肢が増えたことは喜ばしい。（本報告書30～31ページ参照）

⑤　LINEスタンプリリース、YouTubeチャンネル開設――漱石アンドロイドサークルの活動

2023年度の漱石アンドロイドサークルは、小林もも花、松本創太研究助手の二人が指導し、伊豆原潤星非常勤講師が適宜支援する体制で運営された。新入会員17名を加えて、会員数は総勢24名である。1号館10階の「二松学舎大学特別教授夏目漱石　研究室」を拠点として、週二回程度の活動日を設け、音声プログラムの作成や諸イベントの準備などに取り組んだ。②、③で触れた催しも、準備、運営の中心となったのは、サークルメンバーである。

対外的な発信にも力を注ぎ、LINEスタンプ第2弾「いつでも漱石アンドロイド」を2023年9月20日にリリースした。第1弾「ゆるもち漱石アンドロイド」（2019年12月13日リリース）に次ぐもので、今回は、漱石アンドロイドのさまざまな表情を集めた。12月2日には漱石アンドロイドYouTubeチャンネルを設立、『吾輩は猫である』朗読動画などを順次アップロードしている。

活動の幅が拡がると共に、漱石アンドロイドとサークルメンバーとの関係はいよいよ深まっていく。メンバーによって漱石アンドロイドに対する思いは各々異なるが、等し並みでない変化の様相は、人間とロボットとの共生を考察する上でも見逃せない。（本報告書30～33ページ参照）

ロボット学者はなぜ小説を書くのか？ 漱石アンドロイドと人間学としてのロボット研究

大阪大学大学院基礎工学研究科教授　ATR 石黒浩特別研究所客員所長
石黒 浩

ロボット学者にとって、新たなロボットを開発するのは、SF小説を書くのと同じである。未来を想像して、未来を創るための技術開発に取り組んでいるのである。故に、ロボットを作りながら、未来を描く小説を一方で書いているようなものである。

私自身も同様である。未来において人間はどのように生きていくのか、どのようにロボットの技術を自分自身や社会に取り入れていくのかを考えながら、アンドロイドの研究開発に取り組んでいる。そしてそのアンドロイド開発とは、人間に似たロボット、人間と親和的に関わることができるロボットの研究開発である。故に、アンドロイド研究開発は、単なるロボット開発ではなく、人間に関する深い理解が求められる研究開発でもある。

そのようなアンドロイド研究開発について、これまでの私の研究を振り返りながら、人間理解に関する興味深いエピソードについて述べよう。

私の研究が世界的に様々なメディアで取り上げられるようになったのは、自分自身のコピーである遠隔操作アンドロイド「ジェミノイド」を開発してからである。人間理解とロボット開発を同時に進めることを目的に、2000年ごろから、人間に酷似したアンドロイドの研究開発に取り組んだ。そして、2004年には世界発の人間に酷似したロボットであるアンドロイド「リプリーQ1」を開発し、2005年の愛知万博に展示し、世界的な注目を集めた。その後、2007年に今度は自分をモデルとして、遠隔操作アンドロイド、ジェミノイドHI-1を開発した。アンドロイドとは人間に酷似したロボットであり、ジェミノイドとは、双子の遠隔操作アンドロイドのことである。この開発以降、私のロボット研究は世界で注目を集めるようになった。

2000年に始めたアンドロイド開発では、完全自律型のアンドロイドの実現をめざしていた。すなわち、対話相手の身振り手振りや発話を認識しながら、その質問に答えるアンドロイドである。2005年の愛知万博に展示したアンドロイドは、来場者の位置や簡単なジェスチャーを認識し、ごく限られた質問に答えることができた。しかし、そのアンドロイドの性能を向上させるには、身振り手振りや、視線の動きを含む、大量の対話データが必要であることも明らかになった。

その対話データを集めるために開発したのが、遠隔操作アンドロイド「ジェミノイド」である。私自身がジェミノイドのモデルとなると同時に、私自身がジェミノイドを操作して、様々な人と対話しながら、対話データを集めた。私自身がモデルになれば、完成したジェミノイドがどれほど人間らしいかは、生身の私との直接比較によって評価できる。また、そのための対話データが足りなければ、いつでも私自身がジェミノイドを操作して、必要な対話データを収集することができる。

当初はこのように自律アンドロイドの実現を目標に、ジェミノイドの研究開発に取り取り組んだのであるが、取り組んですぐに、ジェミノイドそのものが十分に興味深い研究対象であることが解った。

ジェミノイドを使えば、私が海外に行かなくても、ジェミノイドを海外に送ることで、海外で講演できたり、逆に大学にジェミノイドがあれば、私が出張中でも大学でジェミノイドを使って、講義をしたりすることができる。

ジェミノイドの遠隔操作システムの操作は非常に簡単である。操作者の前には、モニタが置いてあり、そのモニタには、ジェミノイドから見た映像と、ジェミノイドとジェミノイドの対話相手の双方を映し出す映像が映し出されている。操作者は、これらの映像を見ながら対話者と話しをするだけで、それ以外は特に何も操作しない。

一方、コンピュータは操作者の声をマイクから取り込むと同時に、その顔の映像もカメラで取り込んでいる。取り込んだ声は、ジェミノイドに送られ、ジェミノイドの体に取り付けられたスピーカーで再生される。取り込んだ顔の映像は、コ

ンピュータによって解析され、操作者の唇や頭の動きが検出される。検出された情報は、ジェミノイドに送られ、ジェミノイドの唇や頭部を動かす。また、操作者が何もしていないときも、コンピュータはジェミノイドを何もしていない時の人間のように動かし続ける。人間が何もしていないとき、体の動きが完全に止まるわけではない。目は周りを見渡したり、体が揺れたり、その人特有の動きをする。ジェミノイドには、私の何もしていないときの動作をあらかじめ計測し、実装されている。これらの機能により、ジェミノイドの操作者は、モニタを見ながら話すだけで、まるでジェミノイドを自分の体のように遠隔操作できるのである。

これらの機能は、何度も改良され、現在では操作者の声だけから、唇、頭部、体の動き、感情を推定し、ジェミノイドで再現できるようになっている。

このジェミノイドを使った講演は多くの人の注目を集め、国内外の有名な研究組織や国際会議から数多くの招待を受けた。ジェミノイドを使った講演で感じた最も興味深いことの一つは、自分のアイデンティティとは何かという問題である。

ジェミノイドを使った講演は常に非常に喜ばれる。特に最初のうちは、私自身とジェミノイドが一緒にステージに立って講演を行っていたのであるが、技術開発が進むと、ジェミノイドだけで講演をできるようになった。そうなると、講演依頼者には、私本人の講演を希望するか、ジェミノイドの講演を希望するかを尋ねることになった。その結果は、ジェミノイドの講演のほうの人気が高かった。

私に講演を依頼する人の多くは、私自身よりも、私が開発したロボットに興味を持つ人が多い。それゆえ、ジェミノイドを間近で見れるジェミノイドによる講演が好まれる。ジェミノイドが講演すれば、講演も聴けるし（質問は遠隔操作で私が答える）、ジェミノイドも間近で見られるのである。一方、私が講演すれば、講演しか聴けない。海外での講演においては、特にジェミノイドの講演を希望する傾向が強い。私自身の旅費（飛行機代や宿泊費等）よりも、ジェミノイドの輸送費のほうが、遙かに安いということもその理由の一つになっている。

このことは私にとっては、かなり悩ましい問題であった。自分のアイデンティティとは何かという問題に直面したのである。人間にとってアイデンティティが大事であると言われるが、そのアイデンティティが自分にはなく、自分が開発したロボットにあるように思えたのである（今でもそのように思っているのだが）。

同時にこのときに気づいたのが、人間に酷似したロボットを開発することの意味は、それにより人間を深く理解することである。人間は表面的な形状だけでなく、その中身も重要である。ゆえに、見かけだけを誰かに似せても、その人になることはない。しかし、実際に人々は、その見かけをものすごく気にかける。ジェミノイドの場合は、自らが講演したり、私が遠隔操作で話しをしたりするので、厳密には見かけだけではないのだが、それでも人々は、ジェミノイドが私に似ていることにこだわる。

アイデンティティとは、社会における自らの存在価値のようなもので、社会の中で生きる人間にとっては非常に重要である。しかし、そのアイデンティティが自分に似たロボットの存在によって、いとも簡単に揺らいでしまうのである。アイデンティティという人間にとって重要な問題が、ロボットの存在によって揺らぐということは、今まで理解することが難しく、認知科学や心理学の研究の対象にもなってこなかったアイデンティティについて、ロボットを通して研究できる可能性があるということである。これこそがロボットを用いた人間理解なのだと思う。

ロボティクスと構成論と小説

立命館大学情報理工学部
教授　谷口 忠大

人間という対象を研究する方法はいくつもある。心理学や脳科学、あるいは哲学はそれぞれの方法で人間を研究してきた。そうした数ある方法のなかでもロボティクスによる人間への接近は、構成論的アプローチに基づく方法である。構成論的アプローチの詳細は後に述べるが、ざっくりと言えば、研究対象を実際に作ってみることでその理解を深めていくアプローチだ。人間に似た存在を実際に作ることで人間を理解しようとする、これが人間の研究における構成的アプローチとしてのロボティクスであり、筆者がこれまでに推進してきた記号創発ロボティクスや、その先駆的存在である認知発達ロボティクスがこれにあたる。本発表では、「ロボット学者はなぜ小説を書くのか?――漱石アンドロイドと人間学としてのロボット研究」というテーマをいただいた。また　第一部のテーマは「なぜ人間を考えるためにロボットを作るのか?」だ。まずは人間を研究する際になぜロボットを作る必要があるかについて語り、次になぜ小説を執筆するという選択をしたのかについて、順に説明していきたい。

1．なぜ人間を考えるためにロボットを作るのか?

心理学や脳科学は、人間にさまざまなタスクを与えることで人間を研究していく。ただしそこには原理的な困難も伴う。人間が出来るタスクは、多くの人間が出来てしまう。人間が当たり前にできてしまっていることの条件は、病気を持っている人との比較などを通して、それが不可能となる条件を探ることによって研究することはできる。しかし多くの場合、比較対象は少数だし、また、操作的に比較対象を作ることは難しいことも多い。マウスの実験のように、人間を被験者として脳の神経をいじったり過剰な心理的負荷をかけたりすることはできない。

しかし構成論的アプローチならば本物の人間ではないものの、操作可能性を得ることが出来る。それが構成論的アプローチの強みの一つだ。

人間がやっていることを再現することによって、人間の知能を成立させている条件を探っていく。そのような試みの一つに認知発達ロボティクスがある。日本では浅田稔や谷淳といったロボット学者たちが、構成論的アプローチによって人間の認知発達の研究を進めてきた。そうした研究の系譜の延長線上で、身体に根差したミクロレベルの相互作用からたち現れる内的表象や記号システムと、マクロレベルに生じた記号システムからのトップダウンな制約というミクロマクロループを捉え、それに基づき記号創発システムという概念を提出し、これに対してロボットを用いた構成論的アプローチをとっているのが「記号創発ロボティクス」だ。

科学はモデルを必要とするが、構成論的アプローチでは、モデルをもとに研究対象を実際に組み立ててみる。ここでモデルとは何かについて少し整理をしておく。モデルは対象そのものとは異なるが、対象の重要な特性や振る舞いを抽象化して再現した理論的な表現だ。このようなモデルには、何段階かのレベルがある。最も初歩的な形態は、対象を言語や図式で説明するモデルだ。こうしたモデルは人間による直感的な理解を助けてくれるが、精緻な予測を行うことは難しい。それを可能にするのが数理的なモデルだ。たとえば初期条件と物理法則を正確に定義すれば、微分方程式を用いることで物体の軌道を高い精度で予測することができる。ただし実際のところ高校でならった物理のように微分方程式の解が数学的手続で解析的に求められる範囲は極めて限られる。そこで計算機モデルが必要となる。解析的に扱うことが難しい問題でも、逐次計算によるシミュレーションでモデルにもとづく予測ができるようになる。しかし人間の実際の知能を考えようとする場合、この計算機モデルでも不十分だ。なぜなら人間は、身体を使って環境と相互作用し、そうすることで能動的に世界からデータを集めて学んでいく存在だからだ。計算機モデルは、外部からデータを与えられないと何もで

きない。こうして必然的に、人間が実際に学び成長していくプロセスを理解しようとするとロボットモデルが必要になってくる。ロボット研究やAI研究と言うと、何か便利な機能を実現するための研究だと受け止められがちだ。しかし筆者が行っている研究が目指している研究それにはとどまらない。ゴールは人間を理解することであり、便利な何かを実現することだけではない。機能を追求するだけであれば計算機モデルで十分な場合もあるかもしれない。しかしそれでは人間を理解するためには不十分だと考えるから、ロボットを作っている。そうした魂（ソウル）を伝えたいという思いも、この後触れる『僕とアリスの夏物語』という小説の執筆につながっている。

2．ロボット学者はなぜ小説を書くのか？

小説の話に移ろう。2022年に出版した『僕とアリスの夏物語　人工知能の、その先へ』という小説には、アリスという金髪の少女が出てくる。最後には人間型のロボット、ヒューマノイドであることが判明する。このアリスは、最初は赤ちゃんのように何もできない。主人公との共同生活の中で、アリスは少しずつ物の概念を理解したり、言葉を覚えたり、場所の概念を把握していく。

認知発達ロボティクスや記号創発ロボティクスではこのよう経時的なプロセスを本当は表現したいのだが、実際のロボットで再現するのは実質現状不可能だ。それゆえに構成論的研究には一定のキャップがかかってしまっている。ところが、小説でなら一連の経時的なプロセスとして描写できる。もちろんそれは真の「構成」からは程遠いが。このようなことを通して、考えるべき問いや論点を提示することは可能だ。この本では小説パートと解説パートが交互に置かれており、小説パートでエピソードとして提示された問いや論点を、解説パートで裏付けとなる考え方と共に展開している。

また問題発見の手法としても、小説には可能性がある。構成論的アプローチによる実際の研究は、どうしても個別のフェーズを切り取ってモデル化していく形になる。たとえば言語の学習に着目する場合には、言語の学習のみに焦点を当てたモデルを作ることになる。しかし人間の実際の発達の特色は、さまざまなフェーズが連続し、どんどん切り替わっていくところにある。こうした連続性を実験において再現することは現実的には難しく、そこから何かの見落としが生じてくる可能性がある。ストーリーという形で、実験では再現することが難しい連続性をシミュレーションしてみることは、そうした見落としを発見するきっかけにもなるはずだ。

加えて筆者は、ビブリオバトルを発案し運営してきた経験から、物語がもつ力について繰り返し考えさせられてきた。説明だけではなかなか分かってもらえない事柄が、ストーリーやエピソードを伴うと不思議と理解してもらえる。だから学問のアウトリーチとして、理屈だけでなく小説の力を借りてより広く科学の理解を届けられるのではないか、と考えるようになっていった。別の入門書のシリーズでは、「ホイールダック」と名付けられたロボットキャラクターを登場させ、そのロボットを作り上げていくというストーリーラインに乗せることで、理論の理解を助けるような工夫もしている。『賀茂川コミュニケーション塾』という本では、高校生と教授との小説仕立ての対話形式で専門的な知識を理解してもらうことを目指した。

3．まとめ

ロボットを作ることと小説を書くことの「人間」理解に関わる論点と、その位置づけを紹介した。人間を包括的に理解するには、身体を持ったロボットから出発する必要があると考えたからロボティクスを選んだし、また人間を理解するためのアプローチとして、小説を通してできることがあると考えたから小説を書いた。以上が、与えられたお題に対するシンプルな答えである。

アンドロイドと人間
――関係性の問題をめぐって

二松学舎大学大学院文学研究科
教授　増田 裕美子

19世紀末の唯美主義を代表するイギリスの作家オスカー・ワイルドは、『嘘の衰退』（1889年）のなかで、「人生は芸術を模倣する」と述べた。至言である。小説に限らず、あらゆるフィクショナルなものから現実に生み出されるものは数多い。たとえば、庄司薫の『赤頭巾ちゃん気をつけて』（1965年）は芥川賞を受賞してベストセラーとなり映画化もされた小説だが、この一人語りの作品のなかで主人公の都立日比谷高校３年生の薫くんは、「中村紘子さんみたいな若くて素敵な女の先生について（中略）優雅にショパンなど弾きながら暮らそうかなんて思ったりもする」と語る。中村紘子とは当時有名なピアニストで、なんとその後実際、作者の庄司薫と中村紘子は結婚するのである。

小説のようなフィクションには作者である人間の欲望、願望が映し出されている。それが現実化することが実際にあり、ロボット学者たちによる小説もその例外ではない。まずは石黒浩が飯田一史の協力を得て著した小説『人はアンドロイドになるために』（2017年）を取り上げよう。

１．『人はアンドロイドになるために』を読んで

この小説は近未来的なSF小説の趣をもっているが、石黒が解題で述べているように、小説という手段を使って未来を想像するということである。石黒自身ははっきりと書いてはいないが、そこには石黒のこうありたいという欲望、あるいはこうなるだろうという予測が表れている。

本書は５つの短編と、それぞれの短編の前後に、「石黒教授と三人の生徒」による対話があり、この対話は短編の物語の解説のような役割を果たしている。本稿では、とくに３番目の短編「とりのこされて」とその続きにもなっている４番目の短編「時を流す」を中心に見ていきたい。それぞれの短編のあらすじ紹介は省略するが、まず「とりのこされて」に登場するロボット至上主義団体に注目しよう。「彼らの考えでは神は全宇宙を創造したのち（後略）」と書かれているように、創造神と思しき存在が前提されており、宗教的な世界観が提示される。明らかにキリスト教ならぬアンドロイド教とでも言うべきものが発生しており、彼らは人間至上主義に反発しロボット至上主義を唱えていることがわかるのだが、アンドロイドと人間に基本的な違いはなく、いずれも西洋の人間中心主義が根本にあることを考えるべきである。人間中心主義には人間と自然を対立項とみなす思考があり、「時を流す」のなかで、「自然環境の上にロボットのための環境を上書き」するといった表現があるように、明らかに人間（ロボット）が自然を征服するという西洋的思考が見られる。

この「時を流す」の後の対話で、『偶像と宗教』について議論がうながされ、生徒たちがロボットと宗教の関わりについて話し合うが、そこである生徒が仏像やお地蔵様やお墓について「ただの木や石なのに、そこに何か宿っている気がする」と述べていることに注目したい。日本人のアニミズム信仰からすればこの発言は当然のことであり、ロボットもアニミズムの観点から神聖なものとして扱うことは可能だ。

ここでロボット創造について金森修の『人形論』（2018年）を参照することは非常に有益だろう。金森は第四章「命と性の交歓」で「〈人間神〉という愚かで気紛れな創造主が、被造物との間で作り出す関係について」論じる。そこでは「人間という〈愚かな創造主〉が、本来、非生命体であるはずの人形に命を求めたり、あるいは逆に自らを人形化して命を凝固させたりする」ということが見て取れると述べて、金森は〈人間神〉が「本当に望むはずのものを作り出そうとする意志の表れ」である、いわば「〈紫の上・コンプレックス〉の具体例」としてヴィリエ・ド・リラダンの『未来のイヴ』（1886年）とバーナード・ショーの戯曲『ピグマリオン』（1913年）を取り上げる。

『未来のイヴ』はエワルド卿が美貌の交際相手であるアリシアの精神の陋劣さに耐えられず、アリシアそっくりの人造人

間ハダリーを作ってもらい、ハダリーに高貴な霊魂を吹き込んでもらうというという話である。金森はこの小説には自然と人工をめぐる論争があるとして、「美しいが、ごく平凡な女性というだけ」のアリシアは「人工物以下のものに貶められ」ているという。そして人造人間を生身の女性のように愛せるかという問いかけがあるといい、「心をもたない」「理性的で技術的な人工美」を「愛せないわけはない」という含意があり、それは「〈反・自然主義〉の極致」であるとする。またこうした人造人間への愛は「〈死姦〉や〈屍体愛〉（ネクロフィリア）を思わせる」とする。

『ピグマリオン』ではイライザという美しいが「言葉の汚い花売り娘」を音声学の知識に基づき、ヒギンズが矯正し公爵夫人に仕立て上げようとする。そこには「未熟な女性を自分の思い通りの女性に育て上げるという願望」があるが、『ピグマリオン』を原作とする映画『マイ・フェア・レディ』（1964年）により明らかなように、やがてヒギンズはイライザに恋するようになる。それは「創造主と被造物との関係」が変化したということであり、「創造主は被造物と同水準の位相にまで〈降臨〉」し、それどころか「むしろ被造物に振り回される被造物以下の水準まで、自ら進んで堕落する」という。

『ピグマリオン』にはその題名の通り、ピュグマリオン伝説が基底にあり、よく知られているように、ピュグマリオンは自ら彫り上げた乙女の像を愛して、神に懇願してその像を生きた女性に変えてもらう。「彫刻という非生物が〈生命〉を獲得」するのである。その後の歴史において「非生命体から生命を生み出すというモチーフ」は何度も繰り返されることになり、「人間は生命を自分で作り出すことに夢中になる」。その文脈の中に「アンドロイド的な自律型ロボット」もあるというのである。

さらに金森はピュグマリオン伝説には「男性の彫刻家・創造主が、女性の彫像・被造物に愛情を捧げるという非対称性」があるという。このジェンダー的な非対称は、すなわち「女性を人形化」し、「女性から生命と主体性を取り上げる」ことである。

また「生きた女性を彫像化し、人形化する」「逆ピュグマリオニズム」は幾つものフィクションに存在し、「人間の人形化」は「屍体愛的傾向を一層露骨に浮き彫りにする」という。人間が人形化すれば、「小言も言わず、排泄も発汗もせず、醜く顔を歪めて苦しむ」こともない。「時間性から脱却し」「死と隣接した美」を生み出す。そして実際、「現代社会で女性がモード雑誌のモデルとしてポーズをとる時」、女性は自らを人形化していることになる。

以上のような議論はつぎに取り上げる谷口忠大の『僕とアリスの夏物語　人工知能の、その先へ』（2022年）についても役立つだろう。

2．『僕とアリスの夏物語　人工知能の、その先へ』を読んで

この作品は小学生の主人公悠翔のもとにロボットとは知らされずに金髪の少女アリスがやってくるところから始まる。この作品のなかでは食事やトイレや入浴といった事柄はまったく問題になっていないので、主人公がアリスをロボットとなかなか認識しないのは現実離れしていると言えるのであるが、引きこもりの主人公が家でアリスと過ごすうちに著者の言う「育まれた関係性」が構築される。

アリスが「美しい少女」であることは前節で述べたように、典型的な〈紫の上・コンプレックス〉の表れでもあるのだが、ここでは関係性の問題に踏み込んでいきたい。

第7話「衝突する者」で悠翔は「アリスは人間だよ。ロボットかもしれないし、人工知能かもしれない。でも、アリスは「人間」なんだ」と言う。興味深いことにそのあとには悠翔は学校に行かない理由として、「ただ平均化されて、同調圧力に従う。まるでロボットみたいに。」と言う。自分は人間なのにロボット化しているというのである。前節でも述べたように、人間は容易に人形化する。人間とロボットはそれほど異なる存在ではないのである。

また悠翔の発言は『星の王子さま』（1943年）を思い起こさせる。地球にやってきた星の王子さまはキツネに出会うが、キツネは王子さまが自分と遊ばないかと言うのに対して、「飼いならされちゃいないから」遊べないと断る。「飼いならす」の意味を尋ねる星の王子さまに、キツネは「仲よくなる」ということだと答える。そして今は自分の目から見ると、王子さまはほかの男の子たちと変わりない男の子で、王子さまの目から見ると、自分はほかのキツネと同じだけど、王子さまが自分を飼いならすと王子さまは自分にとって「この世でたったひとりのひとになるし」、自分は王子さまにとって「かけがえのないものになる」と言う。こうして王子さまはキツネと友だちになり、「この世に一ぴきしかいないキツネ」だと認識する。同時に自分の星においてきたバラの花が「世のなかに一つしかない」「たいせつな」花であることに気づく。自分

が面倒をみたからこそ大切に思うのだということを王子さまはキツネから教えてもらう。

このような王子さまとキツネ、王子さまと花の関係は、王子さまと語り手の「ぼく」との関係でもあり、一言で言えば、愛情関係ということであろう。であれば、悠翔とアリスの関係も読み解きやすい。谷口は悠翔の発言に関して、アリスが「人間と何ら変わらない「他者」だ」ということであり、「育まれた関係性に関する言及」だとするが、より正確には悠翔にとってアリスは自分が面倒をみた大切な、かけがいのないこの世で一つしかない存在になったということであり、やはりそこには愛情という関係性が見えるのである。

関係性という論点は、すべての事柄において重要である。そもそも言語とは何だろうか。谷口は「語と語の関係性で言葉の意味を覚えていく」と言うが、今井むつみ・秋田喜美の『言語の本質』（2023年）によれば、単語は多義的であり、「ことばの意味は文脈によって変わる。だから自分の知っている意味を押し付けて文脈をむりやり解釈するのではなく、文脈に合わせて意味を変える方がよい」ということを学んでいくという。「文脈」とは関係性と言い換えてもいいだろう。文脈については谷口も触れており、テキスト内だけでなく、テキストの外部の様々な文脈も共有していないとコミュニケーションのずれが生じるという。

また『言語の本質』では、「言葉の意味は点ではなく、面」であり、「面の範囲」は「同じ概念領域に属する他の単語との関係性によって決まる」という。ここで数学における圏論を引き合いに出してもいいだろう。蓮尾一郎（「圏論は数学をするための「高級言語」」、東大理学部情報科学科サイト、2018年4月23日閲覧）によれば、圏論とは「対象と射を使う数学のコトバ」である。図は省略するが、XやY といった対象の間に描かれる矢印を射という。圏論の基本的考えは、「あるモノについて調べるとき、そのモノの「成り立ち」を考えるのではなく、そのモノと他のモノの間の「作用」や「関係性」を考える」ことであり、対象が「モノ」、射が「作用」であるという。

言葉も同じように考えることができよう。ある言葉を「モノ」としていくら考えても意味はわからない。その言葉が他の言葉とどのような関係性を持つかによって意味が決まるのである。

関係性については記号接地問題を考える際にも重要になってくる。『言語の本質』では認知科学者のハルナッドがAIの記号アプローチを批判したことを紹介して、「言語という記号体系が意味を持つためには、基本的な一群のことばの意味はどこかで感覚と接地（ground）していなければならない」というのがハルナッドの論点であるという。言語と感覚との間の関係性が重要であるということである。

関係性が重要なのは、たとえば映画監督アルフレッド・ヒッチコックの映画理論における〈マクガフィン〉を考えてみてもわかる。ヒッチコックはフランスの映画監督トリュフォーとの対談（『映画術』1966年）の中で、自作の『海外特派員』という映画作品における〈マクガフィン〉という暗号について語る。そもそも〈マクガフィン〉とは「冒険小説や活劇の用語で、密書とか重要書類を盗み出すことを」言い、ヒッチコックにとって「〈マクガフィン〉という暗号は単にプロットのためのきっかけというか口実にすぎない」のであり、それ自体に意味はないことをヒッチコックは強調する。同様に『汚名』という映画作品においても「サスペンスのきっかけになる単純な口実」として、「ワインのびんに詰められたウラニウムというマクガフィン」を登場させる。これについても「すべてを単純にドラマチックにするための一種の口実であり仕掛け」なのだから、ウラニウムでなくてもダイヤモンドでもよく、「要するになんだっていい」と言う。

このようにマクガフィンとはそのものの意味は重要ではないが、そのものが何らかの作用を及ぼす関係性を作り出す装置であると言える。

3．さいごに

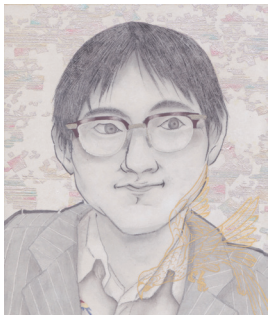
言葉の問題に帰れば、谷口忠大が『賀茂川コミュニケーション塾』（2019年）で「言語は記号の一種」であり、「記号とは「何かを表すもの」」と定義するが、上述した〈マクガフィン〉を見ればわかるように、それ自体に意味はない言葉が存在する。（マクガフィンという言葉自体がそうである。）谷口は同書の終わりに「人間はコミュニケーションする存在」で、「コミュニケーションとは何かを知ることは、人間である自分自身を知ること」だと言うが、それは言い換えれば、関係性のなかで人間は生きているということであり、知ることができるのは、関係性のもとにある人間の姿だけであり、他者の目に映る自分自身しか知ることはできないということではないだろうか。

16世紀フランスの思想家モンテーニュは『エセ―』（1580、1588年）で、外界の事物は感覚の媒介によってとらえられ

るが、「感覚は外界の事物をとらえているのではなくて、ただ自分の受けた印象をとらえているにすぎない」と述べ、「印象と事物とは違うもの」だとしている。すなわち事物の本質は知ることができないというのである。とすれば、人間は人間の本質を知ることはできず、その見かけ、外観に基づく印象しかとらえられない。ロボット創造はこの観点からすると理にかなっていると言えるのではないだろうか。

漱石アンドロイドとシンポジウム登壇者
（2024年3月2日）

漱石、プラグマティズム、信頼できない語り手



大阪成蹊大学
講師　加藤 隆文

0．はじめに

報告者は、プラグマティズムという哲学思想を研究している。プラグマティズムとは、ごく大雑把にいえば、イギリス経験論とドイツ観念論が融合して、19世紀後半にアメリカ合衆国で確立した思想である。

さて、夏目漱石は、『文学評論』（1909年）の記述からも窺えるとおり、ロック、バークリ、ヒュームといったイギリス経験論の系譜にある哲学者たちの思想に通暁していた。また、カントやヘーゲルのドイツ観念論の思想にもある程度触れていた。さらに興味深いことに、岩下弘史が著書『ふわふわする漱石』（2021年）において指摘するように、漱石の生涯を通した思想には、プラグマティズム黎明期の中心的論者の一人であるウィリアム・ジェイムズの影響が色濃く認められる。本報告では、漱石の『文学論』（1907年）に注目し、そこで論じられている文学作品と不道徳性の問題を取りあげる。

ただし、本報告の後半は漱石の議論からは独立して展開する。すなわち、文学作品と不道徳性という問題意識は引き継ぎながら、いわゆるネオ・プラグマティズムの旗手として知られるリチャード・ローティの文学論を参照する。ウラジーミル・ナボコフの『ロリータ』（1955年）に登場するハンバート・ハンバートは、極めて自己中心的な唾棄すべき性質を持つ小児性愛者であると同時に、極めて魅力的な文章を綴る「信頼できない語り手」でもあり、読者は知らぬ間に彼の文章に惹き込まれてしまう。ローティは、こうした不道徳的な書き手の文章に惹き込まれるという文学的経験の持つ道徳的効果を鮮やかに指摘する。本報告では、ここに、漱石が提示した文学と不道徳性の問題に対してネオ・プラグマティズムが導き出す一つの貢献があると論じる。

しかしながら、本シンポジウム全体の趣旨を鑑み、本報告もまたもう一歩議論を展開させる必要があるだろう。すなわち、例えば漱石は、道徳的な判断能力を持ち、道徳的な人生を歩もうとしていたからこそ、文学と不道徳性の関係に懸念をおぼえたはずだ。しかし、漱石アンドロイドが示唆するような、人間と共に生きるロボットないしAIの場合はどうであろうか。道徳的であろうとする人間は、こうした存在に対して道徳的能力や情緒的能力を期待するよりもむしろ、別様の役割を期待した方がよいのかもしれない。本報告では、最後にこうした方向に議論を開いてゆく。

1．『文学論』

夏目漱石は『文学論』において、下記のような図式のもとで文学論を展開している。

> 凡そ文学的内容の形式は（F＋f）なることを要す。Fは焦点的印象または観念を意味し、fはこれに附着する情緒を意味す。されば上述の公式は印象または観念の二方面即ち認識的要素（F）と情緒的要素（f）との結合を示したるものといひ得べし。吾人が日常経験する印象及び観念はこれを大別して三種となすべし。
>
> （一）Fありてfなき場合即ち知的要素を存し情的要素を欠くもの、例へば吾人が有する三角形の観念の如く、それに伴う情緒さらにあることなきもの。
>
> （二）Fに伴ふてfを生ずる場合、例へば花、星等の観念におけるが如きもの。
>
> （三）fのみ存在して、それに相応すべきFを認め得ざる場合（略）。
>
> 以上三種のうち、文学的内容たり得べきは（二）にして、即ち（F＋f）の形式を具ふるものとす。
>
> （夏目漱石『文学論（上）』、p.31）

つまるところ、文学的内容たるもの、認識的要素（F）と情緒的要素（f）の両方が必須であるとの論である。ひとまず、認識的要素は科学的探究により明らかになるような世界の事実に関する記述と受けとめてみよう。文学的内容であるためには、それに加えて情緒的要素（f）が必要である。このf要素に関して、漱石はさらに興味深い指摘をしている。

漱石は、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』（1847年）を取りあげて、文学的内容と不道徳性に関する議論を展開する。主人公ジェインは、家庭教師として雇われたロチェスター家の当主と恋愛関係になるが、当主には精神を病んだ妻バーサがいた。バーサは主人公にとっては恋愛の障壁となる存在である。しかしバーサは、ロチェスター邸の火事で壮絶な最期を遂げる。そしてこの場面において、漱石は指摘する。主人公ジェインに感情移入してきた読者は、ロチェスター夫人の死に一種の慰安を感じるという不道徳を犯すのではないかと。そして漱石は次のように述べる。

> 吾人は文学を賞翫するにあたり、常にこの意味における不道徳を犯すものにして、所謂健全の趣味を解する作者も読者も共に遂にこの偏重を免れ能はざるなり。これ故、かの健全派の人々がかかる不道徳を平然として実現する一方において極力純文芸派を攻撃するは要するに五十歩百歩の議論たるを免れざるべく、作品を支配する道義的観念が或る程度以下に堕落したる時有害の文学としてこれを斥け、もし堕落の程度ここに達せざれば、多少の不道徳分子を含むるにもかかはらず健全なりと誤認して毫も咎むるところなきに過ぎず。故に姦通に同情を強ひ、殺人に嘆賞を値せしむる純文芸派も淑徳あるJane Eyreの作家も道徳的ならざるの点において共に異ることなしといひ得べし。ただ、世人が一方を以て許容すべからざるものとなすの傍、他方を目して健全なりと賞する所以は単にこの不道徳分子の程度如何によって決せられたる問題ならん。
> （夏目漱石『文学論（上）』、p.242）

なるほど、文学的内容に情緒的要素（f）は必須であるけれども、それはときに不道徳性を伴う。『ジェイン・エア』は、孤児としてひどい差別を経験してきたジェインが、寄宿学校での尊敬できる教師や親友との出会いを経て、ロチェスター家住み込みの家庭教師となり、自由恋愛によってロチェスター家当主と結ばれるという物語である。ジェインは、自分の意志を強く持ち、それにより自らの人生を切り拓いてゆくという、当時としては非常に画期的な女性像を打ち出している。この点に注目すれば、『ジェイン・エア』の道徳的価値は高いといえるのかもしれない。しかしながらこの小説には、漱石が指摘するような不道徳分子も認められる。こうした指摘はもっともであるし、さらには、不道徳分子を含む文学作品を健全とみなすべきかどうかはこの不道徳分子の程度によるとする漱石の見解は、ひとまず順当なものに思われる。

2．カスビームの床屋

報告者が研究対象としているプラグマティズムという哲学思想は、20世紀後半において新しい展開を見せた。この新展開の立役者がリチャード・ローティという哲学者であり、ローティから連なるプラグマティズムの新潮流を特に「ネオ・プラグマティズム」と呼称することがある。本報告では、プラグマティズムの歴史について掘り下げることはしないが、ローティの主著『偶然性・アイロニー・連帯』（1989年）から、ローティ思想のある重要な側面を捉えた文学論を取りあげる。すなわち、ローティがウラジーミル・ナボコフの小説『ロリータ』の一節に言及して論じた「カスビームの床屋――残酷さを論じるナボコフ」という一章に注目する。言うまでもなく、小説『ロリータ』には、非常に大きな「不道徳分子」が認められる。このことはまず念頭に置いたうえで、ローティの議論に関連する部分を、少し長くなるが引用しよう。

> すっかりやさしくなったロリータはけだるげで、新鮮な果物をほしがっていたので、私はカスビームまで出かけていっておいしいピクニック用の昼食を買ってくることにした。私たちのキャビンは樹木におおわれた丘の頂上にあり、窓から見える道は曲がりくねって下りていってから、二列になった栗の並木のあいだを髪の分け目みたいにまっすぐ進み、感じのいい町へと向かっていて、すみきった朝に離れたところから眺めると、そこは異様なほどにくっきりとして、おもちゃの町のように見えた。虫みたいな自転車に乗った妖精のような少女も見分けられるし、遠近法からすると少し大きすぎる犬もいて、青い丘と赤い小さな人々を描いた昔の絵画でくねくねとした蠟色の道を登ってくるあの巡礼者や騾馬のように、すべてが新鮮だった。私は車なしですませられるものなら徒歩で行こうという

> ヨーロッパ人気質を起こして、のんびりと歩いて下っていくうちに、その自転車に乗っている人物と出会った――お下げ髪をしている、不器量で太った女の子で、三色菫のような目をしたばかでかいセントバーナード犬をつれていた。カスビームでは、ひどく年配の床屋がひどく下手くそな散髪をしてくれた。この床屋は野球選手の息子がどうのこうのとわめきちらし、破裂音を口にするたびに私の首筋に唾を飛ばし、ときおり私の掛布で眼鏡を拭いたり、ふるえる手で鋏を動かす作業を中断して変色した新聞の切り抜きを取り出したりして、こちらもまったく話を聞き流していたので、古くさい灰色のローションの壜が並んでいる中に立てかけてある写真を床屋が指さしたとき、その口髭をはやした若い野球選手の息子が実はもう死んでから三〇年になるのを知って愕然としたのであった。
> （ウラジーミル・ナボコフ『ロリータ』若島正訳、p.376-7）

『ロリータ』の大部分は、小児性愛者ハンバート・ハンバートの手記という体裁で書かれている。そのため、この引用箇所もハンバートの主観で書かれた文章であり、事実がどうであったかは定かではない。その意味でハンバートは、「信頼できない語り手」である。そして当然、ここには、道徳的に許容されようはずもないハンバートの偏見が表れている。ただし同時に、ナボコフによってハンバートは、非常に魅力的な文章を綴る人物として表象されてもいる。現に、この箇所でハンバートは、カスビームの街で味わった雰囲気を、情感たっぷりの饒舌な文体で、魅力的に綴っている。そのうえでハンバートは、カスビームの床屋で経験した一幕について、その床屋の主人に対しては非常に冷淡といえる態度で描写しているのだ。このことを念頭に、ローティは次のように論じる。

> ナボコフの偉大な創造物は偏執狂（オブセッシヴズ）である。キンボートにしても、ハンバート・ハンバートにしても（略）、その創り手が最高の状態にあるときのできばえに匹敵するほどの著述活動をおこなうのだが、彼らのことを、ナボコフ自身はひどく嫌っている（略）。ナボコフが述べたように、ハンバートは「どうにかして「人の心をつかむ」仕方で立ち現れようとする、虚栄心が強く、残酷な悪党」である。どうにかしてそうするのは、ハンバートがナボコフに匹敵するほどにうまく著述できるからである。キンボートもハンバートも、自分自身のオブセッションをあらわす表現に影響を与えたり、そうした表現を与える一切の物事に対してこのうえなく敏感であるのと同時に、自分以外の人たちに影響を与えることにはまったく興味関心をいだかない。こうした登場人物は、ナボコフにとって最大の憂慮の対象である特定の形の残酷さ――興味関心（インキュリオシティ）の欠如――を、いまだかつてなかったほどにドラマ化している。
> （リチャード・ローティ『偶然性・アイロニー・連帯』齋藤純一・山岡龍一・大川正彦訳、p.320）

『ロリータ』の読者は、ハンバートが「信頼できない書き手」であることを知りながらも、いつしかその筆に惹き込まれ、ふとした瞬間に、例えば一見すると道徳的な瑕疵には気づかないような箇所において、ハンバートと同じ視点に立ってしまうことがありうる。三〇年前に亡くなった息子のことを、おそらくは涙ぐみながら語る床屋の主人に対してハンバートが見せた冷淡さ、興味関心（インキュリオシティ）の欠如ついて、あなたは自分とは無関係だと言い切れるだろうか。先の引用において、「掛布で眼鏡を拭」く、「ふるえる手で鋏を動かす」という床屋の主人のふるまいから、涙ぐみ、感極まって手がふるえている姿を想像しただろうか。このようにして「カスビームの床屋」の一幕は、読者に、自分自身の中にも存在しうる残酷さについて気付かせる効果がある。この意味で、不道徳的な「信頼できない語り手」によって書かれた（という体裁の）文学にもまた道徳的な効能がありうるのだ。

3．問題提起

以上を踏まえ、全体に向けて問題提起をしたい。本シンポジウム全体を特徴づける石黒と谷口それぞれの小説は、いずれも読者に、人間とロボットが共に生きる未来社会において想起されうるさまざまな哲学的・倫理的問題について、より具体的に考えを深めることを促すものとなっている。そして、漱石アンドロイドを前にした私たちは、ロボットが文学作品を書くとはどういうことなのかにも思いを馳せることになるだろう。これらの関心を、本報告で述べた論点と重ね合わせてみよう。

まず、漱石は、文学作品であるためには認識的要素（F）と情緒的要素（f）の両方が必須であると論じていた。ロボッ

トの書いた文学に、私たちが情緒的要素（ｆ）を感じ取るという未来はありうるだろうか。漱石は『文学論』において、さまざまな種類のＦならびにｆを分類して検討してゆくのだが、それに際して彼は、興味深いことに、人間の心理的作用が確立してきた過程について言及している。いわく、「心理の作用」はもとは反射運動に始まるが、次に生物としての本能行為が展開し、さらには環境内でさまざまな不都合に遭遇することにより意識を生じ、経験を積み重ねて習慣を獲得し、ついには合理的な実用判断力、そして普遍的判断力を持つに至るのだという（『文学論（上）』、p.160）。このように心理の作用が成長してゆく描像はまさに、谷口の小説に登場する人間と共に成長するロボット、アリスの姿に重なる。となると、アリスはいつの日か、漱石の示した文学作品の基準を満たす文章を書けるようになるのかもしれない。

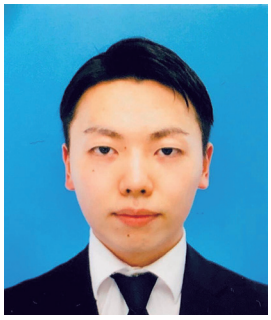
とはいえ当然ながら、はたしてロボットが人間と同様の情緒を持つに至るのか、自身がいだく情緒を文章に表現するロボットなどありうるのか、疑問は残るだろう。ここに、本報告の後半で言及した「信頼できない語り手」の論点が重なってくる。すなわち、ロボットの書いた文章から人間が情緒を読み取ったとして、それは何を受け取ったことになるのか。ロボットが情緒を持つかどうかわからない以上、情緒に関してロボットは「信頼できない語り手」にすぎないのではないか。この点について、「カスビームの床屋」が重要な示唆を与えてくれる。ハンバート・ハンバートは、極めて自己中心的で不道徳的な「信頼できない語り手」であるが、その魅力的な筆致によって読者を惹き込むからこそ、その読者に、自分自身にも残酷さを発揮してしまう契機があるのだと気づかせることができる。すなわち、「カスビームの床屋」の場面を読んだ者は、自分とは全く相容れない倫理観を持つはずのハンバートに知らぬ間に感情移入してしまうことによって、自分自身にもハンバートと同様の不道徳性が存在しうるのだと悟る。このことを、情緒に関しての「信頼できない語り手」であるロボットの書き手に照らし返してみよう。人間と共に長い時間を過ごしたロボットは、人間に感情移入させてしまう文章を書けるようになるかもしれない。アリスがそうであるように、人間の心とは異なる部分もあるかもしれないにせよ、このロボットは漱石が指摘したような心理の作用の適応・成長過程を経て、一種の心を獲得しているとは言えまいか。もしそう言えるのだとすれば、このロボットの書く文学はむしろ、人間とは他様のものと思われていた心理の作用を人間に気づかせる契機となりうるのではないか。ハンバートの文章によって自身のうちにある残酷さに気づくように、ロボットの文章によって人間は他様の心理の作用に気づくのである。

さらに忘れてはならないのは、ハンバートの手記を実際に執筆しているのはナボコフであるということだ。実際に人間を感情移入させる文章を書くロボットが登場するのはまだまだ先になりそうだが、そういうロボットが登場する小説を、ロボット学者は書くことができる。そして、それにより、現在のものとは他様でありうるかもしれない未来の人間の心理の作用について、現在の私たちに想像させることができる。こうしてロボット学者は、小説を書くことにより、ロボットという新しい意味での「信頼できない語り手」と共にある未来の人間の心理の作用を示唆できるのである。

参照文献

岩下弘史『ふわふわする漱石――その哲学的基礎とウィリアム・ジェイムズ』東京大学出版会、2021年。
夏目漱石『文学評論（上）』岩波書店、1985年。
夏目漱石『文学評論（下）』岩波書店、1985年。
夏目漱石『文学論（上）』岩波書店、2007年。
夏目漱石『文学論（下）』岩波書店、2007年。
シャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア（上）』川上弘美訳、岩波書店、2013年。
シャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア（下）』川上弘美訳、岩波書店、2013年。
ウラジーミル・ナボコフ『ロリータ』若島正訳、新潮社、2005年。
リチャード・ローティ『偶然性・アイロニー・連帯』齋藤純一・山岡龍一・大川正彦訳、岩波書店、2000年。

アンドロイドはいかに語られてきたか ――文学と科学の輪舞



二松学舎大学大学院文学研究科
研究助手　伊豆原 潤星

1．はじめに

私は、2018年度から研究助手として漱石アンドロイドおよび漱石アンドロイドサークルに関わってきた。サークルメンバーと漱石アンドロイドとの関係を見ていて驚くのは、大学生たちが漱石アンドロイドに対し、「かわいい」と形容することである。オープンキャンパスや授業などで漱石アンドロイドに初めて接した人々は、漱石アンドロイドに対して「怖い」「興味深い」といった感情を抱くことが多いが、メンバーの反応はそれと対照的である。無論、サークルメンバーも最初から「かわいい」と思っていたわけではない。日々接しているうちに「かわいい」という感情が芽生えていったようだ。接触機会の多さによって慣れが生じ、親近感も増していったということだろう。当たり前のことだが、人間とアンドロイドの関係を考える上では重要である。人間は、接触機会が増えることで、他の人間と接するのと同じようにアンドロイドに対して親近感を抱くことがうかがえるからだ。このように考えると、ロボット研究者によるアンドロイド表象も“アンドロイドとの距離”を踏まえて考える必要があるかもしれない。アンドロイドに慣れ親しんだ者による描写と、そうでない者による描写には必然的に差異が生まれるのではないだろうか。

本報告で取り上げるのは、谷口忠大『僕とアリスの夏物語　人工知能の、その先へ』（岩波書店、2022）、石黒浩・飯田一史『人はアンドロイドになるために』（筑摩書房、2017）の二作である。両テクストは、「研究者を描いた小説」・「理論紹介小説」・「アンドロイドを描いた小説」の三つの側面を持つが、読者が特に意識するのは、「アンドロイドを描いた小説」という点であろう。なぜなら、〈作者がロボット研究者である〉というパラテクスト（形態や作者などテクスト外部の情報）が読者の読解に大きく影響すると考えられるからだ。読者は、アンドロイド研究者が描いた最新かつ正確なアンドロイド描写を期待するだろう。両テクストにおいてこのような〈読みのモード〉が機能することは、留意すべき点といえる。作者と対象との距離の問題、読者による期待の問題の二つを孕んだテクストが、今回扱うテクストなのである。

本報告では、これまでのフィクションにおけるアンドロイド表象と、研究者によるアンドロイド表象を比較し、アンドロイドの現代的イメージと、アンドロイド研究と文学研究の交わりについて考察する。また、フィクションにおけるロボット研究者表象についても論じる。

2．アンドロイド表象の系譜

本報告においては、アンドロイドを「機械で構成された人型のロボット」と定義して進めたい。ロボット・アンドロイドと文学は切っても切れない関係にある。そもそも、ロボットという語は、カレル・チャペックが戯曲『R・U・R』（1920年）で造りだしたものである。また、アンドロイドという語も、オーギュスト・ヴィリエ・ド・リラダン『未来のイヴ』（1886年）に由来する。さらに、ロボティクスという語も、アイザック・アシモフが作ったものだ。このように、ロボット・アンドロイドは文学的想像力と無縁ではない。

ロボットなる語が登場する前から、東西を問わず人類は「人間を模した機械」を夢見てきた。例えば、ホメロス『イーリアス』には、鍛冶の神ヘーパイストスが黄金で作った侍女を使役する描写がある。また、『列子』「湯問篇」には偃師（えんし）という技師が作った人形の逸話がある。やがて、物語のなかで描かれていたものが、技術の進歩によって現実にも登場するようになっていく。まずカラクリ人形が作られ、やがて機械製のロボットが作られるという歴史である。

〈アンドロイドを扱った重要な文学〉

作品名	発表年	特徴
ホメロス『イーリアス』	紀元前800〜?	黄金の侍女
『列子』「湯問篇」	紀元前200〜?	偃師の人形
エドガー・アラン・ポー 『シェヘラザーデの千二夜の物語』	1845	チェス人形
オーギュスト・ヴィリエ・ド・リラダン 『未来のイヴ』	1886	女性アンドロイド。アンドロイドの語源
アンブローズ・ビアス『マクスンの人形』	1893	人を殺すチェス人形
カレル・チャペック『R・U・R』	1920	ロボットの語源
アシモフ『われはロボット』	1950	ロボット三原則が示される
フィリップ・K・ディック『変種第二号』	1953	人間と見分けがつかないアンドロイドが描かれる
フィリップ・K・ディック 『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』	1968	人間とアンドロイドの差異が描かれる
レイ・ブラッドベリ 『歌おう、感電するほどの喜びを!』	1969	お手伝いアンドロイド
石川英輔『人造人間株式会社』	1983	アンドロイドを作る会社が描かれる。新しいロボット三原則の提示
ジョン・スラデック『チクタク』	1983	ロボット三原則を破り人を殺すアンドロイドが描かれる
ダニエル・H・ウィルソン 『ロボポカリプス』	2011	ロボット研究者による小説

アンドロイド表象を考える上では、漫画や映像などの視覚表現も重要になってくる。視覚的に表現されたアンドロイドの姿は、我々が想像するアンドロイドの姿を形づくってきたからである。

漫画では、『鉄腕アトム』が圧倒的な影響力を持つ。人型ロボットとして一番に名が上がるのはアトムであることは疑いようがないだろう。浦沢直樹『PLUTO』をはじめとして『鉄腕アトム』の影響下にある漫画は数多い。現実世界においても、本田技研工業が製造したASIMOがアトムを念頭に作られたことはよく知られた事実である。

アンドロイドを扱った映画も、『メトロポリス』（1926）、『ウエストワールド』（1973）、『エイリアン』（1979）、『ターミネーター』（1984）、『アンドリューNDR114』（1999）、『A.I.』（2001）、『アイ，ロボット』（2004）、『EVA　エヴァ』（2011）など枚挙にいとまがない。

現実の科学水準を反映しながらロボットSFが書かれ、そしてそれを受けてロボットが作られていく相互影響関係によってロボットの歴史は紡がれていったといえよう。

3．記号の身体／生身の身体

記号／生身の身体とは、元々は大塚英志らのマンガ論を端緒として、伊藤剛らが発展的に論じている概念である。記号の身体とは、デフォルメされた非現実的に描写された傷つかない身体を指す。漫画『ドラえもん』において、ジャイアンに殴られ傷だらけになったのび太が、次のコマで何事もなかったかのように振る舞うのは、記号の身体の例である。生身の身体とは、現実的に描写された傷つく身体を指す。漫画の中で死ぬキャラクターは、生身の身体を持っているといえる。

大塚英志は『アトムの命題』（角川書店、2009）において、記号の身体を持ったロボットの抱える命題を「アトムの命題」として、「成熟の不可能性を与えられたキャラクターは、しかし、いかにして成長し得るのか」と問うている。記号の身体を与えられ、成長しないロボットをいかに描くかということは、マンガに限らず、ロボットを描くフィクションが抱える命題でもあるだろう。

4．成長するアンドロイド

従来のフィクションにおけるアンドロイドの多くは成長しない。なぜなら、登場したときには既に〈完成された存在〉であるからだ。アンドロイドは、大人として作られたのであれば大人のままであるし、子供として作られたのであれば子供のまま時を過ごす。三浦雅士は、『青春の終焉』（講談社、2012）で、教養小説批判として成長しない鉄腕アトムを捉えているが、文学の主要ジャンルである教養小説（主人公の人間的成長を描いた小説ジャンル）の登場人物がいつまでも子供のままではいられないことを考えると、成長しないロボットが近代文学に対する批判として機能しているという議論は首肯できよう。

フィクションにおいて、アンドロイドの外見や機能は全く変わらないわけではない。例えば、映画『アンドリューNDR114』（1999）や『ターミネーター』シリーズのアンドロイドは変化する。だが、これらはあくまでパーツの付け替えに過ぎない。機能を付与されるのであって、元からある要素が成長するわけではない。

では、なぜアンドロイドは成長するものとして描かれてこなかったのだろうか。それは、アンドロイドがあくまで人間を補助するものとして位置づけられてきたからである。多くのフィクションの根底には、人間に危害を与えてはならない・人間の命令に服従しなければならない・自己を守らなければならないという、アシモフが考案したロボット三原則が存在している。この原則に則る限り、アンドロイドは人間を支える存在となる。それゆえに、未完成の存在としてではなく、完成された従者として描かれるのである。アシモフのロボット三原則は、ロボットSFにおいて最も強力な原理として駆動し、物語を縛っている。

三原則を踏まえた多くのフィクションにおいて、アンドロイドは、ケアワーカーか、人間と敵対する兵器のどちらかに描かれることが多い。ケアワーカーであれば、完璧な存在として人間をフォローすることが求められる。兵器であれば、物語の都合上、強大な存在として立ちはだかるも人間の主人公達が成長してそれを打倒しなければならない。そのため、アンドロイドも人間同様に成長されては困るのだ。成長の非対称性が物語の推進力となるからである。

しかし、今回取り上げる二作では事情が異なる。これらのロボット研究者による小説では、アンドロイドが成長するのである。アンドロイドを成長させることが両者の構成論的研究アプローチに必須のこととはいえ、内面的にも肉体的にも成長するアンドロイド表象は文学的には特異的なものといえる。アンドロイドの成長と、科学技術の進歩とが重ね合わされていると考えることもできよう。

5．おわりに――マッド・サイエンティストとして描くこと

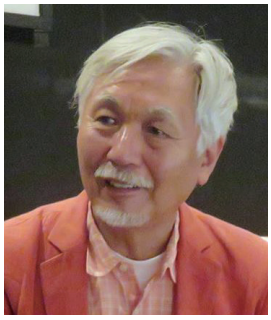
フィクションにおいて、アンドロイドを生み出す研究者は、異端者として描かれることが多い。このことは、人間を作るという行為が神になぞらえられるものであるからだろう。アシモフは、『ロボットの時代』（早川書房、2004〔初版は1964〕）において、多くのSFにおいてアンドロイドが創造主を破滅させるプロットとなっていることを指摘し、それを「フランケンシュタイン・コンプレックス」と称している。近年では、AIに対する関心の高まりと相まって、AIを搭載したアンドロイドの反乱は定番となっている。このような小説において、アンドロイドを生み出した研究者は、マッド・サイエンティストとして描かれる場合が多い。神のみに許される無生殖による人間の誕生を行う人間は、社会から外れた存在でなけ

ればならないからだ。

石黒・谷口の小説において、反乱を起こすアンドロイドこそ描かれていないが、アンドロイドを作る研究者は描かれている。それらの研究者は、社会規範を踏み越える存在として設定されていることは留意すべき点である。自身の反照として読まれるであろう研究者をなぜ社会から外れた存在として描かねばならないのか。それは、単なるSFのモードに基づいているというだけでなく、研究者とは既存の社会規範に従うのではなく、それをアップデートする存在であるという自己規定に基づいているのではないだろうか。ロボット研究と同様に、人間や社会にアプローチする方法として小説創作が位置づけられている。

ここまで、アンドロイドと文学が相互影響関係にあることを述べてきた。2024年3月現在、ChatGPTなど生成系AIの発展がめざましい。このことを受けて、また新たなアンドロイドSFが書かれようとしている。そして、さらに近い未来、それを受けて現実で新たなアンドロイドが作られることになるだろう。文学と科学の輪舞は、まだ終わらない。

ただ会場にいるだけの勇気



漫画批評家
夏目 房之介

2024年3月2日、二松学舎大学中洲記念講堂において開催された漱石アンドロイド・プロジェクトのシンポジウム「ロボット学者はなぜ小説を書くのか？」は、漱石アンドロイドの製作監修者である石黒浩教授『人はアンドロイドになるために』（筑摩書房　2017年）と、立命館大学教授情報理工学部教授・谷口忠大『僕とアリスの夏物語　人工知能の、その先へ』（岩波書店　2022年）『賀茂川コミュニケーション塾　ビブリオバトルから人工知能まで』（世界思想社　2019年）を巡って第一部が展開。休憩後、6人のパネラーによって第二部が展開された。ともに谷島貫太・二松学舎大学文学部准教授が司会を担当。

例によってロボットにも文学にも哲学にもまったく疎い私は、ただぼんやりと座って二つのシンポジウムを聴き、第二部には登壇してしまった。惧れを知らぬ所業だと毎回思うのだが、何しろ「漱石の孫」であり、漱石アンドロイドの「声」を吹き込んだ専任の声優でもあり、素人なりの興味もあるので、困ったもので図々しくもご依頼を断れないのである。

それぞれの専門領域から、様々な角度の検証や仮説が次々語られ、大変興味深く、面白いシンポジウムであった。この印象はまったく嘘ではないのだが、いかにせん、学術的教養のない私の風船頭には情報量が多すぎ、パンパンになってしまった。

谷口さんの『僕とアリスの夏物語』は、まるで軽やかな若者向け青春小説を装いながら、少年と少女の話のあいまに本格的な人工知能に関する解説や注釈が入り、その都度「読み」の速度感が極端に変わる経験をした。まるで水泳とボクシングを交互にやるみたいな（やったことはないが）不思議な感覚だった。通常の小説ではあまり感じられないだろう。

加藤隆文・大阪成蹊大学講師の発表「漱石、プラグマティズム、信頼できない語り手」は、以前から興味のあった漱石とプラグマティズムの関係を示唆され、かつリチャード・ローティの「信頼できない語り手」という小説の語りに関する概念が興味深かった。「語り手」のありように関してはマンガ論でも議論のあるところなのだ。伊豆原潤星・二松学舎大学講師の「アンドロイドはいかに語られてきたか――文学と科学の輪舞」では、過去のアンドロイド文学をホメロスや列子から近代文学まで辿り、さらに大塚英志手塚論の「記号的身体」と「傷つく身体」の議論にまで言及された。ここはマンガ論の領域なので、ようやく私の専門領域に触れてきた。

しかし、すでにシンポジウムの持ち時間は残り少なく、ここで私が議論に踏み込んでしまうと帰ってこれない混乱を招くこと必至であった。なので勇気ある撤退を試みつつ、最後にむにゃむにゃと不明瞭な発言をして時間を超過してしまった。まことに申し訳ない次第だが、シンポそのものからは大きな啓蒙を受けたことをお伝えしておきたい。

漱石アンドロイドのありふれた物語

二松学舎大学文学部
准教授　谷島 貫太

2024年3月2日、シンポジウム「ロボット学者はなぜ小説を書くのか?――漱石アンドロイドと人間学としてのロボット研究」が開催された。その冒頭を飾ったのが漱石アンドロイドによるパフォーマンスだ。今回のシンポジウムで漱石アンドロイドに脚光が当たったのは、実質的には「ポーの奇妙な物語――開会の辞に代えて」と題されたこのパフォーマンスの場面だけだった。そこで本稿では、オープニングパフォーマンスの台本と演出を担当した者として、簡単な解題を試みてみたい。

1．エドガー・アラン・ポーの「ヴァルドマール氏の死の真相」と奇怪な物語

オープニングパフォーマンスは、漱石アンドロイドが開会の辞のなかでエドガー・アラン・ポーの短編小説「ヴァルドマール氏の死の真相」を紹介する、という構成になっている。ポーのこの作品は、文学理論家のロラン・バルトがその詳細な分析を展開したことでも知られるが、今回のパフォーマンスに直接関係するのは、1973年に発表されたバルトのテクストからさらに遡ること6年、1967年に刊行された哲学者ジャック・デリダの『声と現象：フッサール現象学における記号の問題への序論』だ。

『声と現象』の最終節「根源の代補」の中ほどで、デリダは「私（Je）」という言葉に伴う不可思議さについて論じている。その議論の延長線上で、「ポーの奇怪な物語une histoire extraordinaire de Poe」への言及が出てくる。作品名には触れられていないが、その「奇怪な物語」が「ヴァルドマール氏の死の真相」だ。その言及の文脈を押さえるために、以下に簡単な補助線を引いてみよう。

〈私〉という言葉は、〈ここ〉や〈さっき〉などの時空間的な指示詞（直示＝ダイクシス）と同様に、発話のコンテクストが確定されないとその指示対象も確定されないという性質を持つ。言語学者のローマン・ヤコブソンは、そのような記号をシフター（転換子）と呼び、パースの記号論を踏まえて指標的象徴という性質をもつ記号だと位置づけた。指標的というのは、そこでの記号作用が現実の発話者と結びつく連続性に依存していることを指す。象徴的というのは、そこでの記号作用が、約束事（コンヴェンション）の体系のなかで個別の現われを超えた一般的な意味を指し示すことができることを指す。「私は死んでいる」という言葉が文法的に何を意味するのかは、日本語を理解できれば誰でも理解できる。しかしそこで死んでいるのが誰であるかというより具体的な指示対象は、その発話のコンテクストが与えられないと確定できない。このような二重性を、ヤコブソンは指標的象徴と呼んだ。

ところで指標的象徴の事例としての「私は死んでいる」という発話は、とても悩ましい問いを投げかける。というのも、象徴のレベルではこの表現には何一つ問題はないが、指標のレベルでは、この発話はどこにも接地しないように思えるからだ。フッサールは、記号的な意味の根源を主観における経験的な現前に見出す。エージェントAの内部にある十全な内部表現Xが存在していて、それが記号のうちに透明に表現される。これが、デリダが〈声〉と呼んだフッサールにおける意味のモデルだ。このフッサールのモデルに従うなら、「私は死んでいる」という記号表現が真に存在するには、「私は死んでいる」という表現が指し示す事態を実際に体験し、その体験についての十全な内部表象を作り上げた特定のエージェントがどこかに存在していなければならない。しかしそのようなエージェントは、現実には存在しえない。死んでしまったら、「私は死んでいる」と発話できないからだ。

ポーの短編の面白さの一つは、現実には生じえない「私は死んでいる」という発話を、死にそうな人間に催眠術をかけるという奇怪な仕掛けをかませることで実現させたという点にある。

「そうだ――いや、そうではない――わたしは眠っていた――いまは――いまは――死んでいる」
I have been sleeping—and now—now—I am dead.

もちろん虚構の中にゾンビや幽霊を登場させて「私は死んでいる」と語らせることは簡単にできるし、至るところでなされている。問題なのは、意味と記号をめぐるフッサールのモデルが、こうしたありふれた言語運用の事実と原理的に衝突してしまうように見える、という点だ。特定のエージェントの体験に根差した内部表象には帰着しえない言語表現は、そもそもなぜ成立可能なのか?これがデリダによるフッサール批判の核心の一つだ。それゆえデリダはポーの物語に現れた事態は「奇怪な物語une histoire extraordinaire」ではなく「ありふれた物語une histoire ordinaire」なのだと示唆する。

2．〈私〉の生と死

「私は死んでいる」という発話は、ポーの物語における最後のヴァルデマール氏による発話がそうであったように、いかにも奇怪なものに見える。しかしデリダは、そこに見られる事態は人間の言語においてはありふれたものなのだと主張する。なぜならそもそも言語が言語として機能するのは、それが個々の主観における体験から自律して反復することが可能であることによってだと考えるからだ。たとえばデリダは、「私は死んでいる」とは異なってより一般的な、誰かが自身の直前の知覚に基づいて述べる「私はいま窓からしかじかの人物を見ている」という知覚陳述の事例を挙げる。この事例においては、発話内容に対応する主観的な体験およびそれについての内部表象を想定することは容易だ。しかしこのような発話についても、デリダは「この表現の内容は理念的であり、その統一性は、いまここでの知覚が不在になっても損傷を受けることがない、ということが、私のこの作業のなかに構造的に含まれている。」と述べる。特定のエージェントの特定の知覚に基づいた表現においても、そこには「窓」や「見る」などの意味論の側面、あるいは語順などの統語論の側面で、象徴として意味が分節されている次元が含まれている。そして言語のそうした象徴の次元は、その発話者の知覚の〈いまここ*hic et nunc*〉から切り離されても理解可能である。知覚陳述の発話者が、その発話を第三者にも理解できる形で言語化するには、あらかじめ与えられた特定の言語システムに参入する必要があり、その条件をクリアした後で初めて、発話者の〈いまここ〉あるいはそれと結びついた個別の体験がその言語システム内で意味として表現されることが可能となる。

〈私〉と発話した時点で、その言葉を発した者は、自身の主観的な体験から切り離されて機能する言語システムへと参入することになる。この事態をデリダは、「〈私〉の宣言には私の死が構造的に必然である」というテーゼとして要約する。ところで、主体と言語の間で介在されるとされる〈死〉の捉え方には二種類ある。

一つは、かつての〈生〉が沈殿していくことで時間が経つにつれ後続の世代にとっては疎外的な構造として機能していく、という捉え方だ。これはフッサールが意識の次元（『内的時間意識の現象学』）あるいは歴史の次元（「幾何学の起源」）で採用している説明原理で、デリダによる批判の対象となった。現在に取り憑く過去としてのマルクスによる亡霊概念の批判（『マルクスの亡霊たち』）も同様の構図だ。いずれも、主体に疎外的なものとして機能していく以前に、どこかの時点でそれ以前の透明な関係が原初的なものとして成立していたはずだ、という想定において西洋形而上学における現前の神話として批判される。

もう一つが、言語の手前や起源において成立している内部表象というものはそもそも存在せず、言語において表象可能な内部表象は、そもそもの初めから言語という〈死〉によって浸透されている、という捉え方だ。デリダの立場はこちらだ。たとえばデリダが提示する「代補supplément」という概念は、補われるという運動によって、補われる対象が事後的に構成されるという事態を指す。これを主体と言語の関係に適用すると、言語において表現されるとされる主体の内部表象が、実際には言語表現の実現を通して事後的に言語表現に先行するものとして構成される、という複雑な事態を指すことになる。このような考え方と結びつくことで、事後性という複雑な時間性をともなって差異が生み出されるプロセスを示す「差延différance」という概念や、またつねに遅れを伴って実現されるものとしての記号の範例としての筆記（エクリチュール）の概念が展開されることになる。ただしこの点に深入りするのは本論の課題ではない。

3．反復する言語とありふれた〈私〉

漱石アンドロイドによるパフォーマンスは「いつまで私は話しつづけるのだろうか？」という独り言が繰り返されることから始まる。この〈私〉とは誰だろうか？シンポジウムのプログラムには、その発話行為は「漱石アンドロイドによるオープニングパフォーマンス」だと書かれている。しかし漱石アンドロイドの前の机には、「夏目漱石」と書かれた名札が置かれている。ここでの〈私〉という主語が指標するのは、どのような主体だろうか？

自己紹介があればわかりやすい。どのような主体として発話が行われるのかがそこで明確になる。しかし「一応本日の主役であるようなので、自己紹介は省かせてもらいます」と省略されてしまう。ポーの小説の話をするとの宣言の後、漱石アンドロイドは漱石がかつてポーについて書いていたことについて他人事として言及する。それではやはり〈私〉とは漱石アンドロイドのことだろうか。しかし漱石アンドロイドが自分で考えて話しているわけではなく、台本を読み上げているだけであることはみんな知っている。演劇のなかで俳優が台本に沿って演技を進めるとき、観客はその俳優の発話を俳優という主体の発話としては受け取らず、俳優が演じる人物の発話として受け取る。そう考えると、〈私〉とは夏目漱石である、という線も生きているかもしれない。ただよく考えてみれば、そもそもこのオープニングパフォーマンスは演劇とは違うものなのではないか？プログラムには、「ポーの奇妙な物語――開会の辞に代えて」と書かれている。開会の辞としての役割を果たすのであれば、それは演劇作品とは違うものなのではないか。それとも、「開会の辞」というタイトルの演劇作品なのだろうか。

このオープニングパフォーマンスを通して、どこを見ても〈私〉が正確に誰であるのかがよくわからない。もちろんこのように〈私〉を宙づりにすることは台本の意図ではあったが、そのように宙づりにされた〈私〉が本当は誰なのかということは、書いた人間にもよくわからない。その上でパフォーマンスの最後には、その得体のしれない〈私〉が、自分は単独な何かと言えるのだろうか、個々の人間のようにかけがいのない何かでありうるのだろかと自問する。この自問の主体とは、いったい誰なのか？

デリダのエクリチュール概念は、狭い意味での文字に限定されるものではない。そもそも話し言葉も原理的にはエクリチュールである、というのがデリダの主張だ。主体という意味の源泉に還元されない形で言葉を反復させるものは、すべてエクリチュールだと言えるだろう。その点で言えば、漱石アンドロイドもまたエクリチュールであることは間違いない。漱石アンドロイドが発する〈私〉は、漱石のデスマスクから作られたその口元の動きとともに、〈死〉によって徹底的に浸透されている。その姿は奇怪にも見えるだろう。しかしおそらくデリダが述べるように、そのような〈私〉と、自分を本当の人間だと思っている私たちが発する〈私〉との間には本質的な違いはなく、どちらもが得体のしれない言葉を反復しつづける「ありふれた私」であるはずなのだ。

学生による新たな試み――漱石アンドロイドサークルの活動報告

二松学舎大学大学院文学研究科
助手　松本 創太

二松学舎大学大学院文学研究科
助手　小林 もも花

1．はじめに

本稿は漱石アンドロイドサークルの今年度の活動報告である。今年度は新たに1年生が11名、２年生が1名、３年生が5名と計17名が加入しており、既存のメンバー7名を含めて計24名が活動に参加していた。コロナウイルスの感染拡大が収まったことで積極的に活動を行えるようになった前年度の方向性を引き継ぎ、今年度は前年度に実施しなかったオープンキャンパスおよび創縁祭、シンポジウムといったイベントに取り組んだ。また別稿で詳しく述べられているが、新たな試みとしてYouTubeでの動画制作も行った。以下ではそれらについて報告する。

2．オープンキャンパス

8月20日に実施された本学のオープンキャンパスでは、202教室を利用して漱石アンドロイドによる「吾輩は猫である」の朗読イベントを行った。それに加えて今回新たな試みとして「夏目漱石○×クイズ」を実施し、クリアファイルやポストカードといったグッズを配布した。以下、順に説明する。

「夏目漱石○×クイズ」は夏目漱石の略歴に関わる問題が計５問出題され、一定時間ののちに司会およびスライドにて正解を発表し、その正解について漱石アンドロイドがコメントするという企画である。具体的な問題として「夏目漱石は本名ではない ○か×か?」、「漱石が留学したのはフランスである ○か×か?」といったものがあり、実は漱石アンドロイドが朗読の前に行う自己紹介の内容が把握できていれば解ける構成になっている。これらの正解が発表されたのちに、自身の漱石という名が「漱石枕流」に由来し正岡子規から譲り受けたものであることや、ロンドンへの留学中は神経衰弱に陥り苦しかったことなどが漱石アンドロイドの口から語られた。最終問は「漱石は「I LOVE YOU」を「月が綺麗ですね」と訳した ○か×か?」であり、自己紹介を把握しただけでは解けない問題にした。これは「漱石が訳したエピソード」として紹介されることが多いものの、具体的な出典は現時点で不明であるため、×が正解となる。イベントに参加してくれた親子が「最後の問題、○だと思ってた。新しい知識が増えたね」と語り合う様子が見られた。出典を検証するという点で文学部の学びに関わる内容となっており、オープンキャンパスに適した試みであったと思われる。

グッズは学生メンバーが描いた夏目漱石のイラストをクリアファイルとポストカードにプリントしたものである。自己申告制の正答数で配布するグッズに変化をつけようとしたが、参加人数を考慮し全員に配布する運びとなった。

これらの問題および漱石のコメント、グッズは全て学生メンバーが主体となって作成したものであり、既存の朗読イベントに新たに追加する形で活動の幅が広がったといえよう。

3．LINEスタンプのリリース

前年度の共同研究報告書で作業を進めていた新規LINEスタンプが今年度9月20日に「いつでも漱石アンドロイド」というタイトルでリリースされた。2019年12月にリリースした第1弾となる「ゆるもち漱石アンドロイド」ではイラストがメインであったが、第2弾となる今回は全て実写の写真を素材としている。メンバーがこれまでに撮影した写真を素材とし、そこに基本的な挨拶や漱石の作品に登場するセリフを選定し、加工および文字入れといった作業を行った。2023年10月から2024年1月31日までに23件の売り上げがあった。

4．創縁祭

11月3日に実施された創縁祭では中洲記念講堂を利用した朗読イベントを行った。創縁祭こちらもオープンキャンパスと同様に「夏目漱石○×クイズ」およびグッズの配布を実施した。朗読内容は定番ともいえる「吾輩は猫である」であり、朗読後に「夏目漱石○×クイズ」を行った。本番中の動作トラブルに際して司会を務める学生メンバーがアドリブでカバー

する光景が見られ、前年度の特別授業から司会を担当することになった学生メンバーの習熟が感じられた。

創縁祭への参加はコロナウイルスの感染拡大前は定例的に行われていたものの、拡大によって一度途切れてしまった試みであった。本年度では再びその試みを再建することができたように思われる。

5．漱石アンドロイドシンポジウム「ロボット学者はなぜ小説を書くのか？――漱石アンドロイドと人間学としてのロボット研究」

3月2日に行われる本イベントでは、オープニングパフォーマンスと休憩間のパネル展示発表を漱石アンドロイドサークルが担当する。

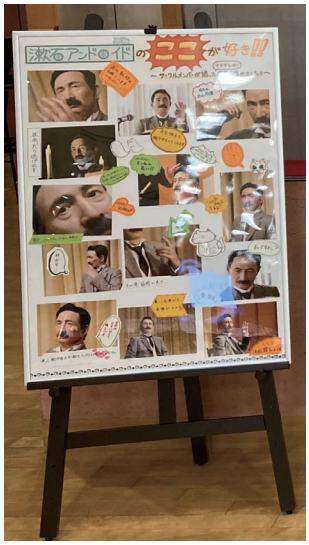
オープニングパフォーマンスについては、谷島貫太准教授が書き下ろした台本を基に、音声を調整、考えた動作をプログラミングしていく作業を行った。この作業には、台本を如何に理解・解釈するかが肝となるため、文系的なスキルが極めて重要になってくるといえる。今回の台本は、観客に向けての漱石の言葉、『ヴァルドマール氏の死の真相』の内容、物語内のセリフという3つの構造で成り立っている。そこで、音声・動作を作成していくにあたり、言葉と言葉の「間」を特に意識した。普段の朗読以上にポーズを長めにとり、前後の音声のピッチでメリハリをつけ、全体が平坦なものとならないように心がけた。また、音声最後のポーズを長くとることで、「動作」のみに焦点を当てる箇所を設ける試みも行った。音声による「間」を効果的に使うことで、動作・場の空気感など、漱石アンドロイドの表現が広がることは大きな発見であった。

パネル展示については、漱石と二松学舎大学の関係・サークルの活動年表・サークル活動・漱石アンドロイド解剖図・メンバーが選んだ漱石アンドロイドの写真といった、漱石アンドロイドサークルの情報が凝縮されているパネルを学生が一から作り上げた。特に、漱石アンドロイドの写真パネルについては、研究対象としての漱石アンドロイドだけでなく、サークルの学生たちがこれまでの活動を通して見て来た、学生たちの眼差しを通した漱石アンドロイドの写真を集めた。また、パネルの配色やデザインなどにもこだわった。学生が描いた、漱石の作品モチーフのイラストを背景として扱ったり、二松学舎大学と漱石アンドロイドに相応しい色でパネルを統一したりし、こだわって作成した。これらのパネルは、漱石アンドロイドに最も触れているサークル学生だからこそ作り上げることができたものであり、学生たちの漱石アンドロイドへの深い愛情と理解を感じさせる、非常に意義のあるものであったといえよう。

シンポジウムにおける活動を通して、漱石アンドロイドと漱石アンドロイドサークルの関係がより近づいたように思われる。

6．おわりに

2023年度はオープンキャンパス・LINEスタンプのリリース・創縁祭・YouTube動画制作・シンポジウムと漱石アンドロイドのパフォーマンスを披露する機会が多く、○×クイズなどの新たな試みも行った。新たに加入した学生も増え、既存の学生たちと共に一体となって活動することが出来た。2024年度も引き続き、イベントやYouTube動画制作など、精力的に活動を行っていくつもりである。また、本年度は活動を通してグッズ制作や動画制作、パネル製作などサークル学生たちの目覚ましい活躍が見られた。漱石アンドロイドを通して、サークルの学生たちが思考を深め、能力を発揮することができたことは、教育的にも意義があったといえる。来年度も漱石アンドロイドを媒介としたサークル活動の場において、サークルの学生、個人個人が活躍できるように尽力していきたい。



漱石アンドロイド紹介パネル①
（製作　山根胡桃、池田花梨、村場千裕）

漱石アンドロイド紹介パネル②
（製作　山根胡桃、池田花梨、村場千裕）

YouTube「漱石アンドロイドチャンネル」の運用研究

二松学舎大学文学部都市文化デザイン学科
学生　東井 夕紀菜

1．はじめに

今年度、漱石アンドロイドサークルではYouTubeチャンネルの運用を開始した。2021年度、2022年度の報告書にSNSないしYouTubeの活用についての記述があるように、以前から構想があったものだ。今年度から筆者が中心となり本格的に運用に向けて着手し、2023年12月に初投稿に至った。本稿では、YouTubeチャンネル開設に際しての準備段階から実際に動画を投稿するまでの経過、投稿後の反響、今後の運用について報告する。

2．YouTubeの運用目的

サークルとしてYouTube運用に踏み切った理由は、漱石アンドロイドを普及させるためだ。漱石アンドロイドサークルの活動は学内外イベントや展示会、学内の特別授業が主で、これらはすべて対面で行われる。イベント出演の機会が限られている現状で、魅力や面白さに対して知名度が低いと感じている。そこで、まずはより多くの方に見ていただきたいという考えのもと、中学生～大学生をはじめとする若者を主なターゲットに絞り、メディアの活用を決めた。

利用媒体をYouTubeに決定したのは、2022年11月、12月に漱石アンドロイドを用いて実施された特別授業に参加した二松学舎大学一年生と附属高校一年生（計289人）を対象に実施したアンケート結果をもとに、各動画投稿サイトの特性についてサークル内で協議した結果だ。アンケートでは「ほぼ毎日閲覧するSNS」にYouTubeを挙げた人が最も多く、その内YouTube内の「Shorts」というフォーマットも頻繁に閲覧していると回答した学生は6割を超えた。Shortsとは、60秒以内の縦型動画で、視聴者はチャンネル登録していないアカウントを含めて閲覧する傾向にある。つまり、Shorts内のレコメンドに含まれることで新規視聴者の目に触れる可能性が高いのだ。「Shortsで興味を引くようなキャッチーな動画をアップロードしながら、通常動画で漱石アンドロイドの従来のパフォーマンスを披露する」という活用ができることから、現状の漱石アンドロイドにとってYouTubeが最適だと考えた。

3．今年度の取り組み実績

漱石アンドロイドプロジェクトとしてYouTubeチャンネル開設が承認されたのち、2023年9月27日に正式にチャンネルを開設しチャンネルの諸設定やカスタマイズを完了させた。そして、動画の撮影・編集を行い、2023年12月2日20:00に『吾輩は猫である』の朗読動画と、漱石アンドロイドができるジェスチャーを取り上げたShorts動画の計二本を投稿した。

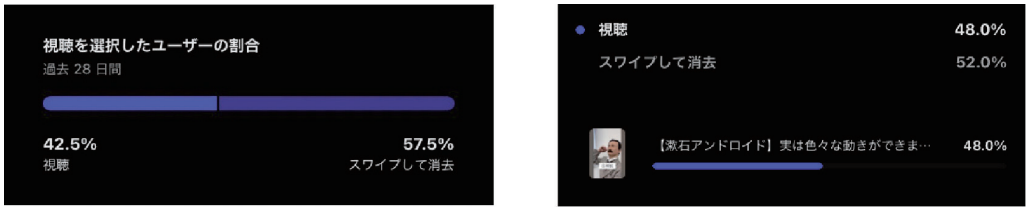
運用一年目となる今年度においては、「YouTube運用の基盤づくり」を目標に取り組んだ。具体的には、再生回数に固執せず漱石アンドロイドの看板パフォーマンスである朗読の動画やShortsフォーマットの投稿を通じて当チャンネルの運用戦略を模索することと、後輩へYouTube運用について継承するマニュアルを作成することだ。マニュアルは、企画立案から準備、撮影、編集など動画制作全般の手順、チャンネル運用案、情報発信の責任等についてまとめ、サークルに寄贈した。運用戦略案については、次章で記述する。

また、当チャンネルの動画制作にあたっては、夏目漱石を通じて発信することに責任を持つよう意識した。YouTubeだけでなく本プロジェクト全体の共通条件だが、夏目漱石の影響力を考慮して、冒涜になる（または、そう感じる人がいる）表現にならないよう細心の注意を払った。

4．動画反響の分析と来年度以降の展望

チャンネル運営者が自身のチャンネルを管理しデータを閲覧することができるポータルサイト「YouTube Studio」を元に、当チャンネルの動向を探る。動画公開から丸二日が経過した2023年12月4日20:00時点と、約三か月が経過した2024年2月23日時点でのデータを比較する。各動画の視聴回数（図1）、実際にShorts動画がショートフィールドにレコメンドで流れてきたユーザーの内そのまま視聴を選択したユーザーの割合（図2）は以下の通りだ。

（図1）各動画の視聴回数
（左：2023年12月4日時点、右：2024年2月23日時点）



（図2）レコメンドで流れてきたShorts動画をそのまま視聴したユーザーの割合
（左：2023年12月4日時点、右：2024年2月23日時点）

投稿から丸二日時点ではShorts動画の視聴回数が高かったが、約三か月経つとほぼ同じだけ視聴されている（図1）。また、視聴者がチャンネルを見つけた経緯を比較しても、投稿初期では「ショートフィールドからチャンネルを知った視聴者」が大半であったが、時間が経過すると「チャンネルページからの視聴者」が上回っている。これらのデータから、投稿して日の浅いうちはShorts動画のレコメンドに含まれやすい為、Shorts動画がチャンネルの入り口としての役割を担っていたことが分かる。利用媒体の決定に際して「視聴者はチャンネル登録していないアカウントを含めて閲覧する傾向にある」と考えていたため、まさに狙い通りの結果だと言える。

しかし、Shorts動画がレコメンドで流れてきても視聴せず次の動画に飛ばす選択をしたユーザーが半数を超えている（図2）。

また、投稿からの時間経過に伴って「チャンネルページから動画を視聴した人」の割合が増えたのは、12月以降Shorts動画を投稿できていないためショートフィールドにレコメンドとして動画が表示されなくなっていたものの、口コミ等から「漱石アンドロイド」を検索しチャンネルページに飛んだ視聴者が一定数いたと推測できる。

これらの結果から、来年度以降に向けて二つの運用案を述べる。一つ目は、Shorts動画の投稿数を増やすことだ。今回はまだ一本目の動画であり大きな反響はないが、数多くの動画を投稿することで必然的にユーザーのレコメンドにあがる回数が増えるからだ。また、初見では漱石アンドロイドのコンテンツ自体にあまり興味がなくても、何度も定期的に目にするうちに飛ばさずに見てみようと考えるユーザーも一定数いると推測する。

二つ目は、多くのユーザーの目に留まるように、切り口を工夫した動画や満足度の高い動画を公開することだ。漱石アンドロイド自体にはあまり興味がなくても思わず飛ばさずに視聴するようなShorts動画や、ショートフィールドからチャンネルページに遷移した視聴者がリピーターになる（チャンネル登録をする等）ことが期待できる質の高い朗読動画を公開することが、チャンネルの発展、ひいては漱石アンドロイドの普及につながると考える。

5．おわりに

2023年度は、先生方、研究助手、大学職員の皆様などのご協力のもと、適切な形でYouTube運用の第一段階をクリアできた。漱石アンドロイドプロジェクト及び漱石アンドロイドサークルの活動の歴史において意味のある取り組みになったと自負している。来年度は後輩に運用を託すことになるが、発信に責任を持つことを忘れずに、継続的な投稿をしてくれることを期待している。

「漱石アンドロイド」プロジェクト　2023年度　共同研究報告書
2024年3月31日初版第1刷発行

編集兼発行者　二松学舎大学　漱石アンドロイド運営委員会

印刷社　株式会社　サンワ

発行所　東京都千代田区三番町6-16
二松学舎大学
TEL：03-3261-7407　FAX：03-3261-1291
URL：https://www.nishogakusha-u.ac.jp/

二松學舍大學
NISHOGAKUSHA UNIVERSITY

大阪大学
OSAKA UNIVERSITY

ATR
Advanced Telecommunications Research Institute International

学校法人二松学舍

〒102-8336 東京都千代田区三番町6番地16　TEL 03-3261-7407